田 村 遺 跡 Ⅸ

－第８次・11次・13次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第384集

福岡市教育委員会
No.
埋蔵文化財センター

１９９４

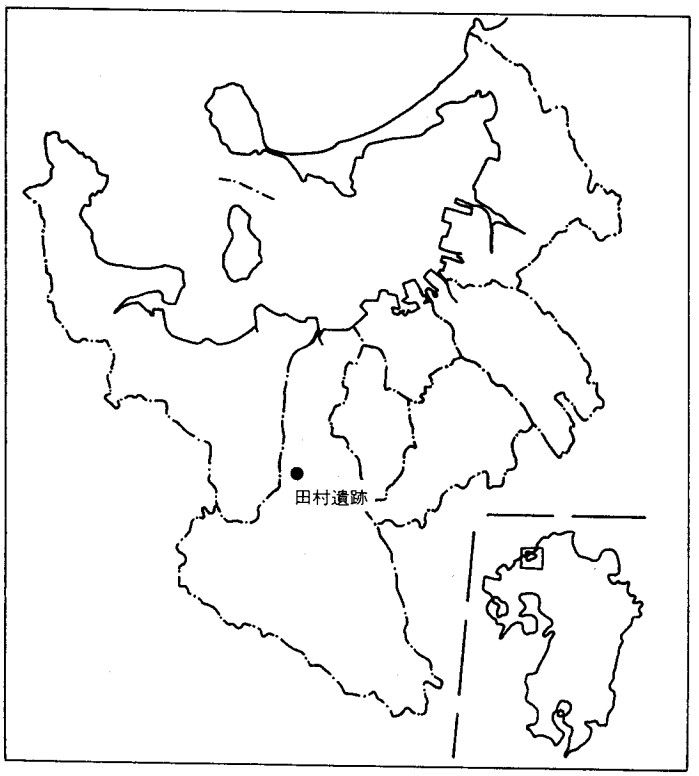
福 岡 市 教 育 委 員 会

TA MURA

田村遺跡 Ⅸ

－第８次・第11次・第13次調査報告－

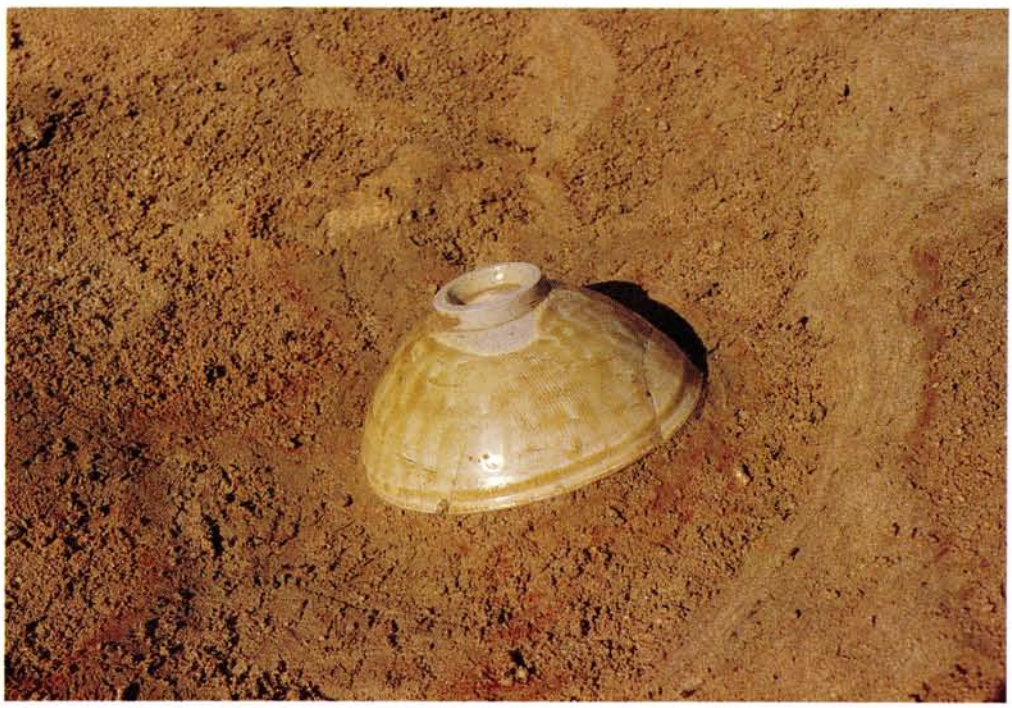
福岡市埋蔵文化財調査報告書第384集



１９９４

福岡市教育委員会

(1)第8次調査区北半部全景(南から)



(2)第8次調査SD001遺物出土状況

(1)第11次調査区全景(南から)

(2)第13次調査区南半部全景(南から)

序　文

福岡市は古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、子孫に伝えることは私どもの義務であり、本市では「海と歴史を抱いた文化の都市像」を目標の一つとしてまちづくりを行なっています。

しかし、近年の都市開発事業によって貴重な先人の足跡が失われていくこともまた事実であります。このため本市教育委員会では事前に発掘調査を行い、記録保存によって後世にそれらを伝えるよう努めています。

今回報告する田村遺跡においても学校、団地等の建設に伴い発掘調査を実施してきました。本書は道路建設に先立ち行なった調査の成果をまとめたものです。この度の調査では、古代から中世を中心とする貴重な資料を得ることができ、早良平野における該期の社会を考察する上で大きな役割を果たすものと思われます。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となると共に、学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。　最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、御理解と御協力を賜りました多くの方々に対し、心から謝意を表します。

平成６年１月

福岡市教育委員会
教育長　尾花　剛

例　言

1.　本書は福岡市早良区役所土木農林課による福岡市早良区田地内道路改良に伴い、福岡市教育委員会が発掘調査を実施した田村遺跡第８次・11次・13次の調査報告書である。

2.　本書で報告した各調査の細目は以下の通りである。

調査次数	調査番号	遺跡略号	調査地所在地	調査面積	調査期間
第８次	8847	TMR－８	早良区田785－1他	632㎡	1988・12～1989・3
第11次	9059	TMR－11	早良区田798－1他	656㎡	1991・1～1991・3
第13次	9247	TMR－13	早良区田1076－1他	581㎡	1992・12～1993・1

3.　本書に掲載した遺構実測図の作成は第８次調査を二宮忠司・瀧本正志・大庭友子・村上かをりが、第11次調査を吉留秀敏が、第13次調査を榎本義嗣・辻節子が行なった。

4.　本書に掲載した遺物実測図の作成は第８次調査を瀧本・力武卓治が、第11次調査を吉留・亀井明徳・井英明が、第13次調査を榎本が行なった。

5.　本書に掲載した遺構写真の撮影は第８次調査を二宮・瀧本が、第11次調査を吉留が、第13次調査を榎本が行なった。

6.　本書の掲載した遺物写真の撮影は第８次調査を力武が、第11次調査を吉留が、第13次調査を榎本が行なった。

7.　本書に掲載した挿図の製図は第８次調査を瀧本が、第11次調査を吉留・井が、第13次調査を榎本・黒田和生が行なった。

8.　本書で用いた方位は磁北で、真北より６°21′西偏する。

9.　遺構の呼称は掘立柱建物をSB、土坑をSK、溝をSDと記号化した。

10.　遺構番号は本書内で３桁の通し番号とし、調査時に用いた番号とは異なる。

11.　本書に関わる図面、写真、遺物等の一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。

12.　本書の執筆は以下の通りである。

Ⅰ.－2.1)、Ⅲ.－1.、Ⅳ.－1.――――瀧本

Ⅰ.－2.2)、Ⅲ.－2.――――――――吉留

Ⅳ.－2.――――――――――吉留・亀井

その他――――――――――――――榎本

また大澤正己先生から第13次調査出土鉄滓の調査報告を頂き、付論として掲載することができた。

13.　本書の編集は瀧本・吉留の協力を得て、榎本が行なった。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに ―― 1
　１．調査に至る経緯 ―― 1
　２．調査組織 ―― 2
　　１）第８次調査 ―― 2
　　２）第11次調査 ―― 2
　　３）第13次調査 ―― 3
Ⅱ．遺跡の環境と概要 ―― 4
　１．立地と歴史的環境 ―― 4
　２．田村遺跡の概要 ―― 6
Ⅲ．調査の経過 ―― 8
　１．第８次調査 ―― 8
　２．第11次調査 ―― 8
　３．第13次調査 ―― 8
Ⅳ．調査の記録 ―― 9
　１．第８次調査 ―― 9
　　１）概要 ―― 9
　　２）遺構と遺物 ―― 10
　　(1)溝 ―― 10
　　３）小結 ―― 16
　２．第11次調査 ―― 17
　　１）概要 ―― 17
　　２）遺構と遺物 ―― 18
　　(1)溝 ―― 18
　　(2)水田跡 ―― 24
　　３）小結 ―― 26
　３．第13次調査 ―― 27
　　１）概要 ―― 27
　　２）遺構と遺物 ―― 27
　　(1)掘立柱建物 ―― 27
　　(2)土坑 ―― 28

(3)溝 ―― 34
(4)その他の遺物 ―― 35
Ⅴ.結語 ―― 36
付論　田村遺跡第13次調査出土鉄滓の金属学的調査 ―― 37

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図(1/50,000) ―― 5
第２図　田村遺跡調査区位置図(1/8,000) ―― 6
第３図　第８次調査区位置図(1/2,000) ―― 9
第４図　第８次調査遺構配置図(1/300) ―― 10
第５図　SD001北壁土層断面実測図(1/50) ―― 11
第６図　SD001南壁土層断面実測図(1/50) ―― 11
第７図　出土遺物実測図(1)(1/3) ―― 13
第８図　出土遺物実測図(2)(1/2、1/3) ―― 14
第９図　出土遺物実測図(3)(1/3) ―― 15
第10図　第11次調査区位置図(1/2,000) ―― 17
第11図　SD001土層断面実測図(1/40) ―― 18
第12図　SD001上層出土遺物実測図(1/3) ―― 19
第13図　SD001下層出土遺物実測図(1)(1/3) ―― 20
第14図　SD001下層出土遺物実測図(2)(1/3) ―― 21
第15図　SD001最下層出土遺物実測図(1/3) ―― 22
第16図　SD001出土遺物実測図(1/3) ―― 23
第17図　SD004土層断面図(1/60) ―― 24
第18図　水田跡出土遺物実測図(1/3) ―― 25
第19図　第13次調査区位置図(1/2,000) ―― 27
第20図　SB005実測図(1/100) ―― 27
第21図　SK006・007・008・009実測図(1/40、1/60) ―― 28
第22図　SK006出土遺物実測図(1)(1/3) ―― 29
第23図　SK006出土遺物実測図(2)(1/3) ―― 30
第24図　SK006出土遺物実測図(3)(1/3) ―― 31
第25図　SK007・008出土遺物実測図(1/3) ―― 33

第26図　SD001・010土層断面図(1/60、1/40)及びSD001出土遺物実測図(1/3、1/4) ―― 34
第27図　遺構検出面出土遺物実測図(1/3) ―― 35
第28図　田村遺跡溝配置図(1/3,000) ―― 36

表　目　次

第１表　田村遺跡調査一覧表 ―― 7
第２表　SK006出土遺物法量一覧表 ―― 35

付　　図

田村遺跡第８次・第11次・第13次調査遺構配置図(1/200)

図　版　目　次

巻頭図版１　(1)第８次調査区北半部全景(南から)
　　(2)第８次調査SD001遺物出土状況
巻頭図版２　(1)第11次調査区全景(南から)
　　(2)第13次調査区南半部全景(南から)
図版１　田村遺跡周辺航空写真
図版２　(1)第８次調査区南半部全景(北から)
　　(2)第８次調査区南半部全景(南から)
図版３　(1)第８次調査区北半部全景(北から)
　　(2)第８次調査区北半部全景(南から)
図版４　(1)第８次調査SD001南壁土層断面(北から)
　　(2)第８次調査SD001北壁土層断面(南から)
図版５　第８次調査出土遺物
図版６　(1)第11次調査区全景(南から)
　　(2)第11次調査SD001(南から)
図版７　(1)第11次調査SD001(北から)
　　(2)第11次調査SD001土層断面(南から)
図版８　(1)水田跡土層断面(南から)
　　(2)第11次調査風景(南から)
　　(3)SD004土層断面(西から)
図版９　第11次調査出土遺物
図版10　(1)第13次調査区南半部全景(南から)
　　(2)第13次調査区北半部全景(南から)
図版11　(1)SK006(東から)
　　(2)SK006中央部遺物出土状況(東から)
　　(3)SK006越州窯青磁碗出土状況(西から)
図版12　(1)SK007(南から)
　　(2)第13次調査SD001(南から)
　　(3)第13次調査SD001土層断面(南から)
　　(4)SD010土層断面(東から)
図版13　第13次調査出土遺物Ⅰ
図版14　第13次調査出土遺物Ⅱ

Ⅰ．はじめに

1．　調査に至る経緯

1988年（昭和62年）11月、周知の埋蔵文化財包蔵地域内の早良区田村地内で道路改良工事の準備が行われていることを当時文化部埋蔵文化財課職員が発見した。連絡を受けた埋蔵文化財課は、直ちに、関係機関に工事地が遺跡内（周知の埋蔵文化財包蔵地）であることを連絡するとともに、工事の準備の停止を求めた。連絡を受けた工事所管課の早良区役所土木農林部土木農林課は、工事の準備の停止を行うとともに、埋蔵文化財課へ道路改良事業予定地内における埋蔵文化財の有無確認を依頼した。依頼を受託した埋蔵文化財課は、工事地内が周知の埋蔵文化財包蔵地域（田村遺跡）に含まれるとともに、工事地の南に位置する田村遺跡の第５次調査等で発見した中世の遺構の広がりが想定されることから、試掘調査を実施することにした。その結果、第５次調査で検出した土地の区割溝と推定されている南北溝の延長部を確認した。この試掘調査成果をもとに関係機関と協議を行い、1988年12月から田村遺跡第８次の発掘調査を実施することとなった。

また、1990年６月には第８次調査区北側で同事業の継続に伴い、埋蔵文化財の有無についての確認依頼が申請された。埋蔵文化財課では同調査区で確認された南北溝の延長が予測されることより土木農林課と協議をもち、1991年１月から第11次調査を実施することとなった。

更に1992年８月には第11次調査区の北側での同事業の継続に伴う同様の確認依頼が申請された。第11次調査によっても追認された南北溝の延長が考えられることより、埋蔵文化財課では土木農林課と協議をもち、1992年12月から第13次調査を行うこととした。

2. 調査組織

1) 第８次調査

調査委託：早良区役所土木農林部土木農林課

調査主体：福岡市教育委員会文化部（現　文化財部）埋蔵文化財課

教育長	尾花剛	（現任）	佐藤善郎（調査時）
文化財部長	後藤直	（現任）	川崎賢治（調査時）
埋蔵文化財課長	折尾学	（現任）	柳田純孝（調査時）
同課第１係長	横山邦継	（現任）	折尾学　（調査時）

調査担当：主任文化財主事　二宮忠司（現　埋蔵文化財センター主任文化財主事）

文化財主事　瀧本正志（現　文化財整備課文化財主事）

事務担当：　入江幸男（現任）　松延好文（調査時）

調査補助：　大庭友子　村上かをり

資料整理：青柳恵子　牛尾美保子　内山孝子　江崎木綿　尾崎京子　斉藤美紀枝　唄よし子　日名子節子　真名子順子　渡辺ちず子

調査協力：有田吉太　井口菊太郎　伊藤みどり　牛尾秋子　牛尾奈美枝　牛尾二三子　牛尾豊　尾崎達也　尾崎八重　大内文恵　金子ヨシ子　菊地栄子　倉光ナツ子　榊光雄　正崎由須子　白坂フサヨ　惣慶とみ子　岳美保子　典略初　鍋山千鶴子　西嶋サキ　西嶋マツ子　林嘉子　平田タマエ　平田勇男　平田千鶴子　細川ミサヲ　真名子ユキエ　山西人美　結城シズ　結城千賀子　結城信子　結城弥澄　脇坂武実　脇坂ミサヲ

2) 第11次調査

調査委託：早良区役所土木農林部土木農林課

調査主体：福岡市教育委員会文化部（現文化財部）埋蔵文化財課

教育長	尾花剛	（現任）	佐藤善郎（調査時）
文化財部長	後藤直	（現任）	川崎賢治（調査時）
埋蔵文化財課長	折尾学	（現任）	柳田純孝（調査時）
同課第１係長	横山邦継	（現任）	折尾学　（調査時）
事前審査	瀧本正志		

調査担当：文化財主事　吉留秀敏

整理補助：井英明

事務担当：　入江幸男（現任）　松延好文（調査時）

資料整理：尾崎君枝、甲斐田喜子、木村良子、丸井節子、森部順子

3)　第13次調査

調査委託：福岡市早良区役所土木農林部土木農林課

調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

教育長	尾花剛	(現任)	井口雄哉（調査時）
文化財部長	後藤直	(現任)	花田兎一（調査時）
埋蔵文化財課長	折尾学		
同課第１係長	横山邦継	(現任)	飛高憲雄（調査時）

事前審査：主任文化財主事　井澤洋一

文化財主事　長家伸　(現任)　吉武学　(調査時)

調査担当：文化財主事　榎本義嗣

事務担当：　入江幸男

整理作業：有馬千恵美　西島信枝　原田真美　松尾幸子　松尾真澄

調査作業：金子啓佑　井上トミコ　井上ヒデコ　井上磨智子　金子ヨシ子　菊地栄子
清末シズエ　正崎由須子　辻節子　林嘉子　平野ミサオ　森山宣子
結城千代子　和田裕見子

II．遺跡の環境と概要

1．　立地と歴史的環境

玄界灘に北面し、背後に脊振・三郡山系をひかえる福岡市には西から今宿、早良、福岡、粕屋の中小平野が展開する。これらの各平野は山系より派生する丘陵、山塊によって画され、古くから地理的、歴史的に独自の環境を有している。

今回報告する田村遺跡の位置する早良平野は西側を脊振山系から北に派生する飯盛、長垂山塊に、また東側を油山山塊に区切られ、平野の中央には室見川が博多湾へと北流する。平野には河口部を中心に洪積台地が点在し、北辺部には砂丘が形成されるが、その大部分は室見川を中心として金屑川、十郎川などの中小河川による沖積作用によって形成される。

田村遺跡は平野中央南側の沖積地上に立地し、室見川中流の東岸400ｍに位置する。

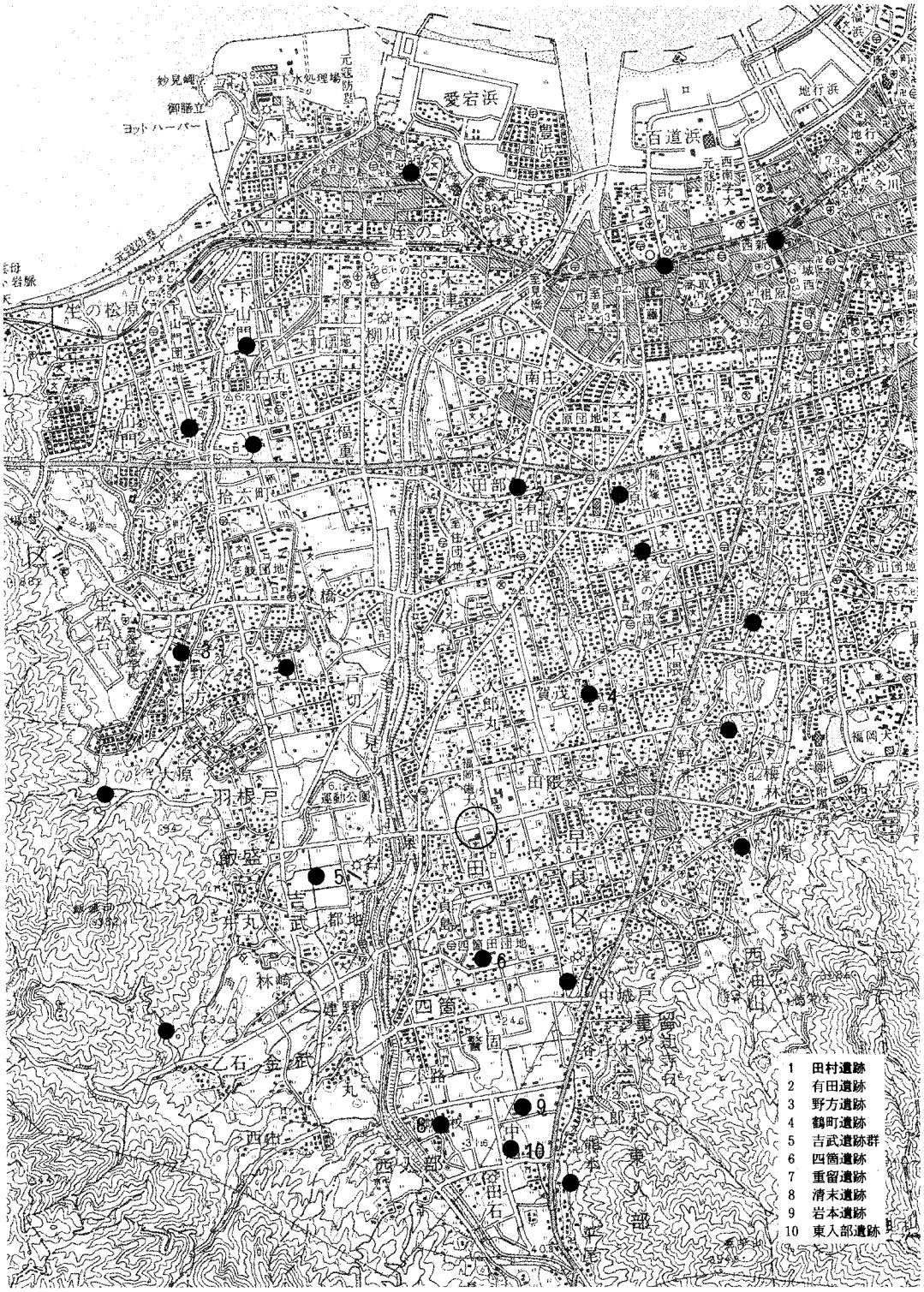
平野南部の周辺遺跡を概観すると、縄文時代では田村遺跡の南側に位置する四箇遺跡で後・晩期を中心とする多量の土器・石器又、植物遺体が確認されている。また、その南東の重留遺跡では晩期の竪穴住居、墓地等から構成される集落が検出され、該期の好資料を提供した。

縄文時代末から弥生時代前期には平野の中央部以南にすでに生活の痕跡が認められ、重留遺跡、岩本遺跡、東入部遺跡では竪穴住居、貯蔵穴、甕棺墓等が確認されている。室見川を挟み本遺跡と対峙して扇状地に広がる吉武遺跡群には前期から中期を中心として大型掘立柱建物や青銅器等の副葬品を有する甕棺墓群が検出され、該期の当平野における首長層の消長を考える上で極めて貴重である。また、東入部遺跡においても吉武遺跡群に並行する時期の同様の遺構が認められるが、その内容には格差があり社会構造を考察する上でも興味深い。沖積地においては四箇遺跡、鶴町遺跡等で水利施設が確認されており、中期から後期にかけて沖積微高地に生活基盤を求めた様相が窺い知れる。

古墳時代の墳墓ではクエゾノ古墳、樋渡古墳、拝塚古墳、梅林古墳等の首長墓が４世紀末～６世紀中葉にかけて築造され、後期になると平野周縁の山麓部には多数の群集墳が営まれる。集落は弥生時代の後期に一部断絶があるが、前代を踏襲し、吉武遺跡群、岩本遺跡、東入部遺跡等でその形成が認められる。

古代の様相は不明な点が多いが、東入部遺跡で検出された大型建物は官衙的な色彩が濃く、また周辺では最近、製鉄関連の遺構が比較的まとまって確認されていることも含め、今後の調査成果によってより具体化された歴史像が明らかにされよう。

古代末～中世にかけては沖積地での生活が定着し、企画的で大規模な水利施設が各所で認められる。清末遺跡では大型建物や居館が造営され、田村遺跡と同様に沖積地内での水田開発を担った拠点的集落であったと考えられる。



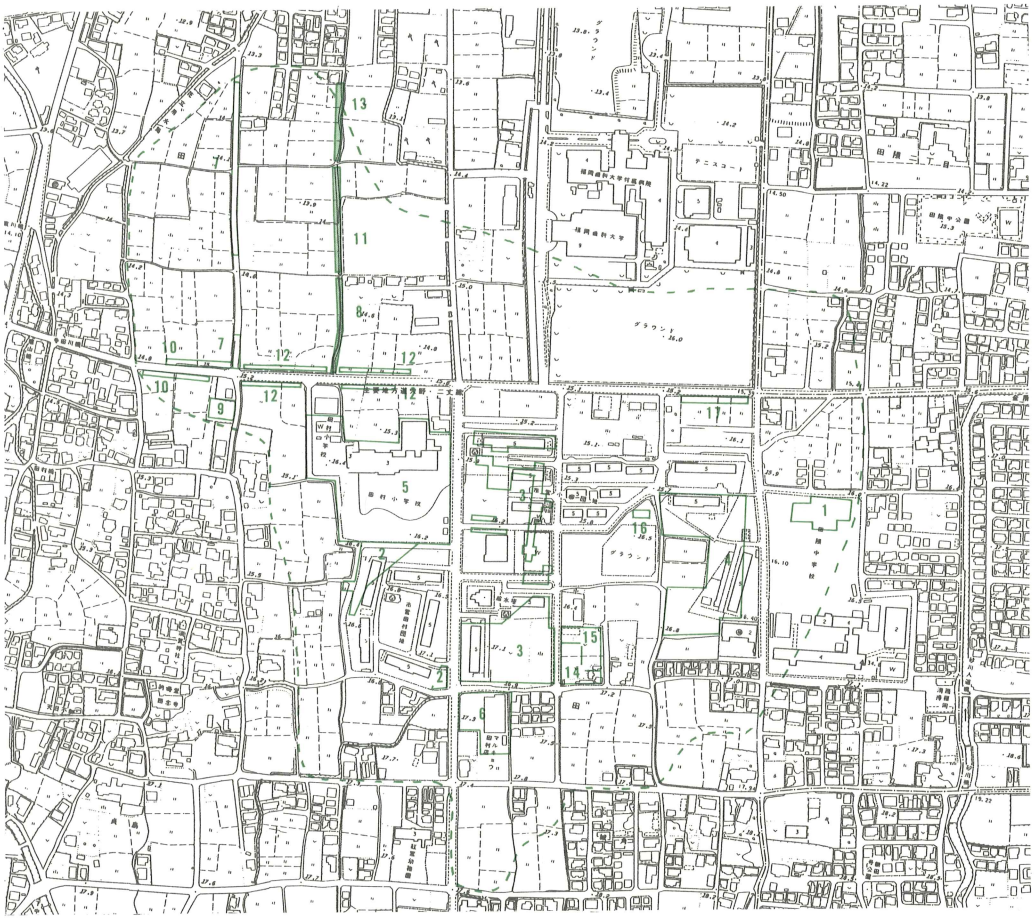
第１図　周辺遺跡分布図（1/50,000）

2.　田村遺跡の概要

田村遺跡は沖積地上に展開する東西約760ｍ、南北約850ｍの遺跡群で、学校・団地・道路建設等に伴い、これまでに16次の調査が行われてきた。その結果、縄文時代から近世に至る多数の遺構及び遺物が確認され、遺跡の様相が明確になりつつある。

その概要は第１表にまとめたが、中心となる時期は弥生時代及び中世で、前者では前期の段階にはすでに第５次調査で検出された墓地等から生活の痕跡が看取される。中期以降には第２・３次で確認された水利施設や第３・17次調査の竪穴住居から推察すると、沖積地における水田開発が該期に本格的に開始され、遺跡東側の微高地上に集落が営まれたものと考えられる。

平安時代の後半以降には多数の掘立柱建物群が第２～５次・14・15次調査で検出されており、該期の平野内における最大規模の集落の出現を見ることができる。特に第５次調査で確認された集落は継続的かつ拠点的なもので、建物規模や出土遺物の質量が他を凌駕する。また、本遺



第2図　田村遺跡調査区位置図（1/8,000）

跡も含め周辺地域には整然とした条理地割が既存の道路・水路・水田畦畔に良好に遺存しており、その地割に重複する溝が第５・７・12次調査で検出されている。今回報告する第８・11・13次調査地は第５次調査で確認されたSD100の北側延長部に該当し、以下の調査成果に示す様に同様の溝の継続が確められ、区画の精度を再認識することとなった。

調査次数	調査年度	調査概要	調査報告書
第１次	1978	古墳時代前期の土坑、平安時代の土坑等	市報第 70集
第２次	1980、1981	弥生時代中期の河川・井堰、古代～中世の柵・掘立柱建物・竪穴住居・土壙墓等	市報第 89集 市報第104集
第３次	1981、1982	弥生時代の竪穴住居・河川・杭列、中世の掘立柱建物・井戸等	市報第167集
第４次	1982、1983	平安時代の掘立柱建物・土坑・井戸等	市報第216集
第５次	1984、1985	縄文時代後・晩期土坑、弥生時代前期の甕棺墓、中世の掘立柱建物・土坑・井戸・溝等	市報第192集 市報第200集
第６次	1984	縄文時代後・晩期のピット等	未報告
第７次	1984	古墳時代の竪穴住居・甕棺墓、中世の溝等	市報第168集
第８次	**1988**	**中世の溝等**	**本報告**
第９次	1989	中世の溝・土坑・柱穴等	市報第302集
第10次	1989	中世の溝・柱穴等	未報告
第11次	**1990**	**中世の溝等**	**本報告**
第12次	1992	中世の溝・土坑・井戸等	市報第385集
第13次	**1992**	**平安時代土坑、中世溝等**	**本報告**
第14次	1992	平安時代掘立柱建物等	未報告
第15次	1993	平安時代掘立柱建物等	未報告
第16次	1993	旧河川等	未報告
第17次	1993	弥生中期前半～後半竪穴住居・溝等	未報告

第１表　田村遺跡調査一覧表

Ⅲ．調査の経過

1．　第８次調査

発掘調査は、1988年（昭和63年）12月２日に着手し、1989年（昭和64年）３月11日に終了した。調査に際しては、次の二点を調査の主題として設定した。一点は、第５次調査で検出した中世集落の広がりをおさえること。二点目は、第５・７両次調査において確認された、中世の土地区割と密接な関係が考えられる南北溝と現在に遺る土地区画との関係、および溝が内包する地形形成を明らかにすることであった。バックフォーにより南半部から表土の除去を開始した。その結果、表土下0.7ｍの遺構検出面において、第５次調査でSD100と称される南北溝と数条の規模の小さい溝を検出した。南北溝は、岸の東岸を確認するに止まり、調査区中央部において僅かに向きを西に変える。溝内からはコンテナ20箱の陶磁器等が出土した。調査途中の２月中旬からは、瀧本が緊急調査のために担当を外れ、二宮が一人で担当した。

出土遺物の整理、報告書の刊行は、1993年４月～1994年３月に行なったが、これは瀧本、二宮の両名ともに埋蔵文化財課から異動したためによる。

2．　第11次調査

調査にあたって、事前に現場事務所を設置し、機材の搬入を行った。田村遺跡群の第11次調査地点は第８次調査地点の北側に連続する道路部分である。幅約６ｍ、長さ約110ｍの調査区を設定した。調査開始以前に水田用水路を調査区の西側に沿って付け替えた。調査は1991年１月18日に、まず重機により表土、客土の除去から始めた。排土は隣接の水田にビニールシートを敷き仮置きした。その後人力により遺構検出を進め、検出した遺構については順次調査を行った。遺構の掘り下げに沿って、遺構図、土層断面図の作成、写真撮影などをおこなった。調査終了後は再び重機により埋め戻し、転圧をおこない、復旧した。作業の終了は1991年３月９日である。その後機材の撤収、現場事務所の解体をおこない、全作業を終了した。

3．　第13次調査

調査区内で排土置場を確保することが困難であったたため、止むを得ず南北に調査区を分け、打って返しの調査を実施することとした。まず、第11次調査に継続する南側調査区の重機による表土剝ぎを1992年12月１日より開始した。調査区の略中央には南側より延びる既存の水路が設置され、その除去にかなりの時間を費やした。また、既設の南側水路は常時の水量は少量であったが、降雨等によって時折増水し、調査区が水没するなどの困難に見舞われたが、当初から予測されていた溝等の遺構を確認した。南側の調査を終了した翌年１月上旬に重機によって排土を反転し、北側調査区の表土剝ぎを行なった。全調査の終了した１月下旬に重機による埋め戻し及び仮水路の設置を実施し、１月30日を以て全作業を終了した。

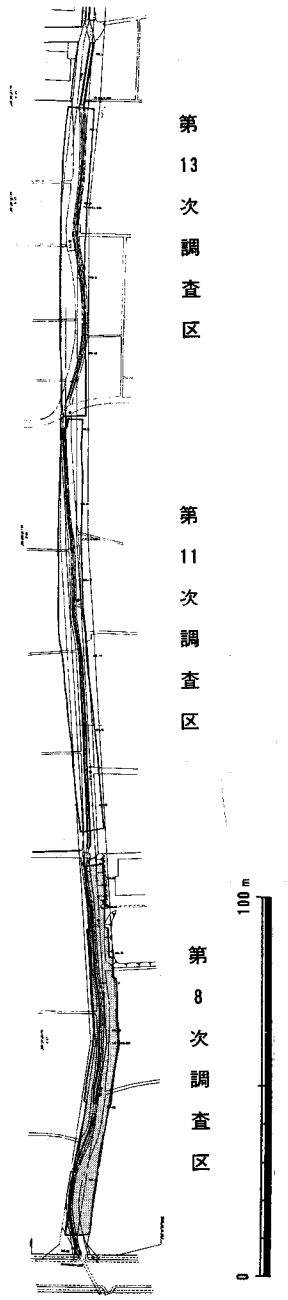
Ⅳ．調査の記録

1．　第８次調査

1)　概要

調査地を含む一帯は、方一町（約109ｍ）に区画された水田が広がり、古地形が良好に遺っている。調査地は、この区画された坪の東西辺を画す境界上に位置する。近年の調査地の周辺における発掘調査では、この整然とした土地区割りに密着に関係すると考えられる遺構が、相次いで発見されている。調査地から真南に50ｍの地点、すなわち坪は異なるものの、同じ区画線上に位置する地点では、学校建設に伴う発掘調査（田村遺跡群第５次調査：1984～85年）が実施され、11世紀～14世紀にかけての大規模な集落および12世紀前半機に開削されたと推定される大溝が検出されている。報告書では、大溝はSD100と呼称され、幅3.5～９ｍ、深さ約１ｍを呈し、埋土中からは大量の在地の土器や中国産陶磁器等が出土している。また、調査地を坪の東辺と見た場合、西辺に位置する地点、およびその区画線上の地点において行われた発掘調査（田村遺跡群第７次調査：1984年）においても、SD01と呼称される南北溝を検出している。溝の規模は、幅２～3.2ｍ、深さ約0.15ｍを呈し、埋土中からは12世紀後半～13世紀に比定される土器、陶磁器等が出土している。

本調査地における遺構検出は、地表下0.7ｍ、標高13.6ｍを測る茶灰色粘性砂質土上面で行い、南北溝のSD001（田村遺跡群第５次調査SD100）をはじめ東西溝SD002、南北溝SD003等を確認した。調査区内では、SD001の全容を明らかにすることはできず、溝の東岸を確認するに止まった。溝の埋土から出土した中国産陶磁器類などの遺物が示す年代は、第５次調査の所見と同じくするものである。現在の水路およびか畦畔は、中央部で逆「く」の字状に彎曲し、SD001も同様な形状を示している。この状況は、遺構の形状および土層に遺された水路の堆積状況からも、現水路がSD001を初現として現在に至ることを物語る。



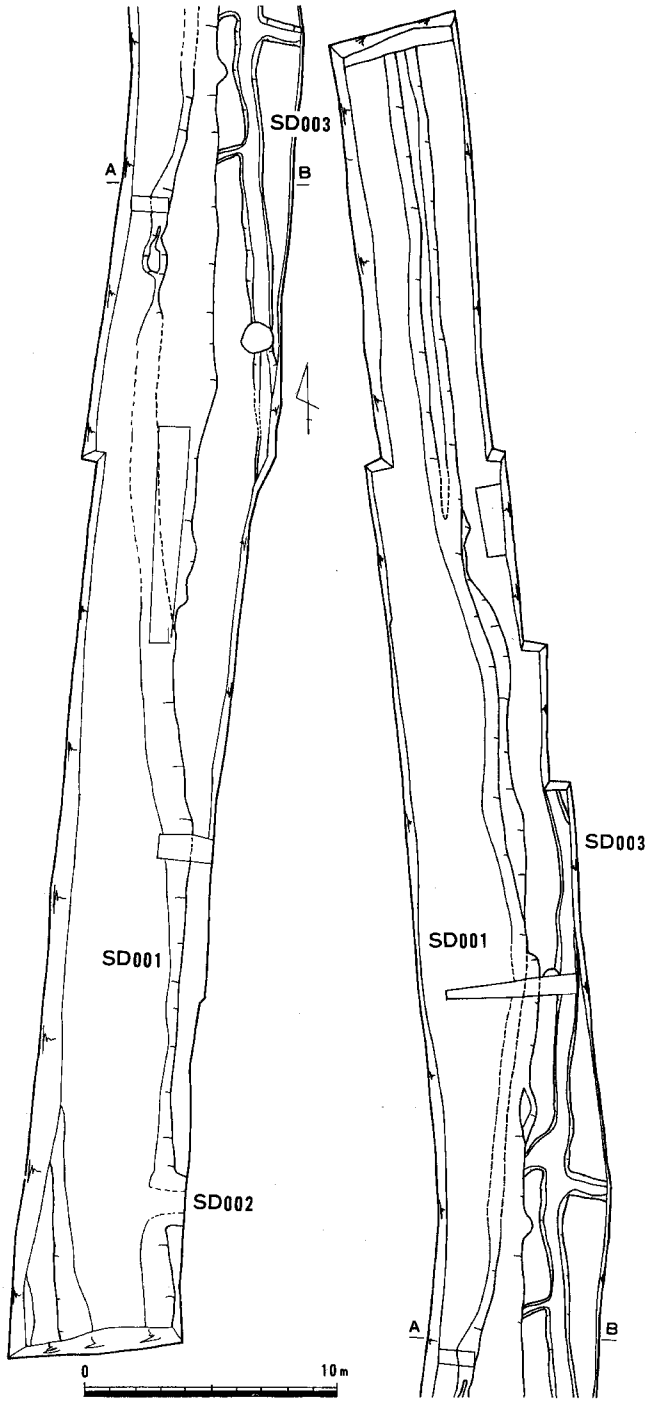
第3図　第8次調査区位置図
(1/2,000)

2) 遺構と遺物

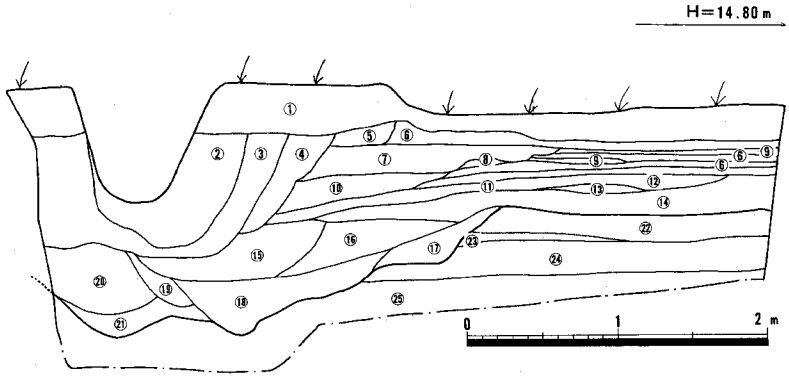
(1) 溝

SD001(第４～９図,巻頭図版１・図版４・５)　調査区西半分を占め南北溝で、北流する。総長99ｍ、深さ0.8ｍを検出したが、調査区から北へさらに続く。溝の幅員は、西岸が調査区外に位置するために不明であるが、溝底の形状から５ｍ～７ｍが推定される。溝の東岸線は、調査区中央部でねこれまで北東方向であったのが真北に向きを変え、逆「く」の字型を呈する。溝の流れも同様と思われ、この形状は溝の真上に位置する現水路や畦畔と同じくする。溝底高は、長さ約100ｍを測る溝の北南両端で、0.5ｍの標高差を有する。溝の断面は弧を描くように穏やかに立ち上がり、溝底および溝面近くには付近一帯を形成する礫混じりの沖積層が露呈している。

第５・６図に示すように、溝の堆積状況は、溝が時代の変化と共に堆積・改修を繰り返しながら、規模の縮小化、溝底高の高位の変遷をしめしている。溝は、規模、溝底高等から大きく２群に区分される。一つは開削期と規模を同じくするもの、他方は地表面高を現在と同じくし、幅員が１～３ｍを呈して開削期の１／３以下の規模となる群である。両者の共通項として、両群の溝は変遷を繰返していく過程において常に初現

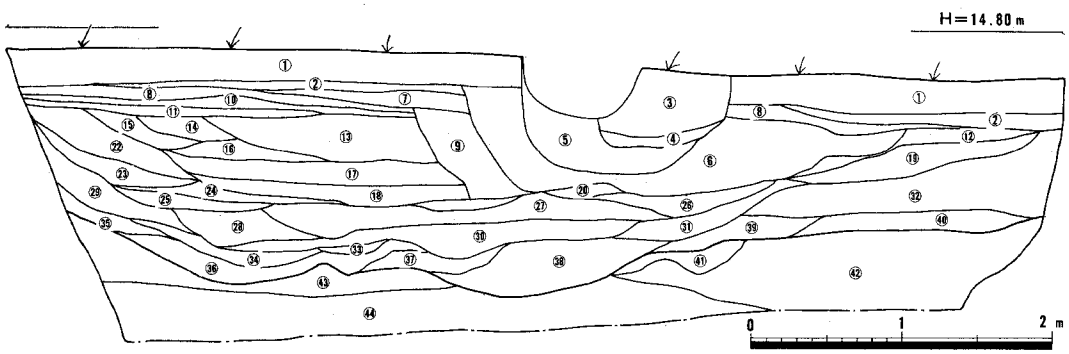


第4図　第8次調査遺構配置図（1/300）



①表土（黒色土）
②暗灰色砂質土
③暗黄褐色砂質土
④明灰褐色土
⑤暗灰褐色土
⑥黄褐色土
⑦灰褐色砂質土
⑧暗黄褐色土
⑨茶灰色土
⑩灰褐色土
⑪茶灰色土
⑫暗茶灰色土
⑬黄褐色砂質土
⑭茶褐色土
⑮茶灰色砂質土
⑯黄褐色砂質土
⑰茶灰色砂質土
⑱暗茶灰色粘性砂質土
⑲灰色砂質土
⑳暗灰色粗砂混り暗茶灰色砂質土
㉑暗茶色粘性土
㉒茶灰色粘性砂質土
㉓暗灰褐色粘性砂質土
㉔灰褐色粘性砂質土
㉕緑灰色シルト

第5図　SD001北壁土層断面実測図（1/50）



①灰褐色砂質土
②灰褐色＋黄褐色砂質土
③バラス混り黒色砂質土
④暗褐色粗砂質土
⑤暗灰色砂質土
⑥暗灰褐色砂質土
⑦灰褐色砂質土
⑧黄褐色砂質土
⑨暗灰褐色砂質土
⑩灰褐色砂質土
⑪暗黄褐色砂質土
⑫淡灰褐色砂質土
⑬暗褐色砂質土
⑭暗灰褐色砂質土
⑮暗灰褐色砂質土
⑯灰褐色砂質土
⑰灰白色細砂質土
⑱鉄分を含む灰褐色粗砂質土
⑲灰褐色砂質土
⑳黒灰色砂質土
㉑黄灰色粘性土
㉒暗褐色砂質土
㉓暗褐色砂質土
㉔黒灰色粘性土
㉕灰白色細砂質土
㉖黒灰色砂質土
㉗黒灰色粘性土＋灰褐色砂質土
㉘灰褐色砂質土
㉙灰褐色土＋黒灰色粘性土
㉚黒灰色粘性土
㉛黒灰色粘性土
㉜暗灰褐色砂質土
㉝灰褐色砂質土
㉞暗灰色粗砂質土
㉟灰褐色砂質土
㊱灰褐色土＋黒灰色粘性土
㊲暗灰色粗砂質土
㊳暗灰色粗砂質土
㊴暗灰色粗砂質土
㊵暗灰色砂質土
㊶黄灰色粘性土
㊷褐色粗砂質土
㊸濁緑白色粗砂質土
㊹褐色粗砂質土

第6図　SD001南壁土層断面実測図（1/50）

期の溝の中心線に位置する。すなわち、初現期の溝を意識しながら変遷したことが明らかである。

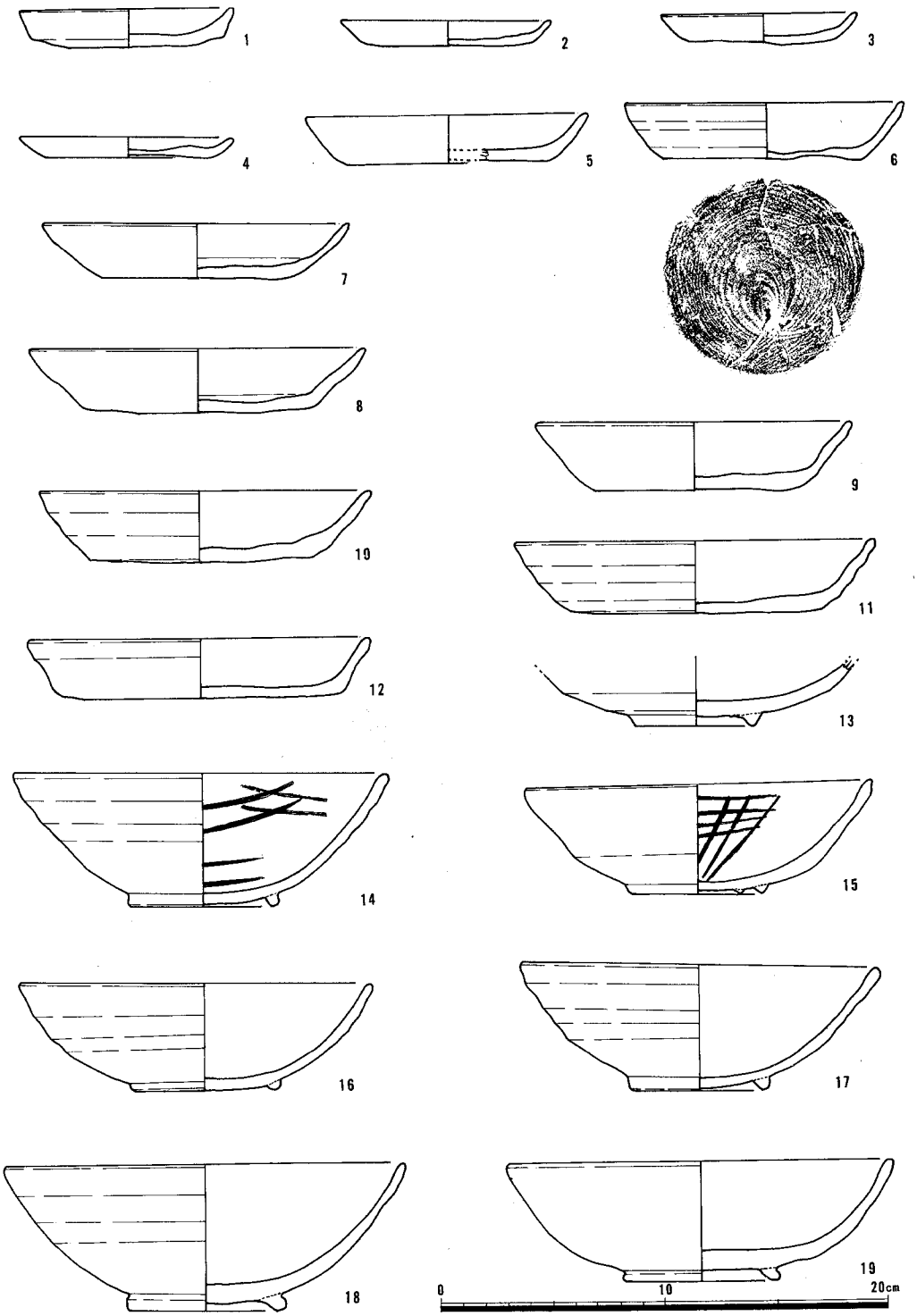
遺物は、覆土中から、土師器（小皿、坏）、磁器（腕、皿、合子）、須恵器（摺鉢、広口壺）、瓦質土器（椀）、施釉陶器（椀）、石器（鍋、石製品）等の遺物がコンテナに20箱出土している。小皿、坏底部には糸切り痕跡が認められ、ヘラ切り痕跡を有するものは認められない。

SD002（第４図・図版２）　調査区の南東隅に位置する東西溝で、SD001と直交する。幅員2.5m、深さ0.8mを測る。溝の壁は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。溝は、調査区内において長さ１m程の検出に止まったが、さらに調査区外の東方へ延びていることは明白である。西方については、調査区においてSD001そのものが完全に検出されていないことから不明である。土地区画に結び付く可能性が高いが、今調査では極めて限られた情報量であるので、今後に期したい。SD001との時間的前後関係は、同時期もしくはSD002が若干遅れての開削と考えられる。

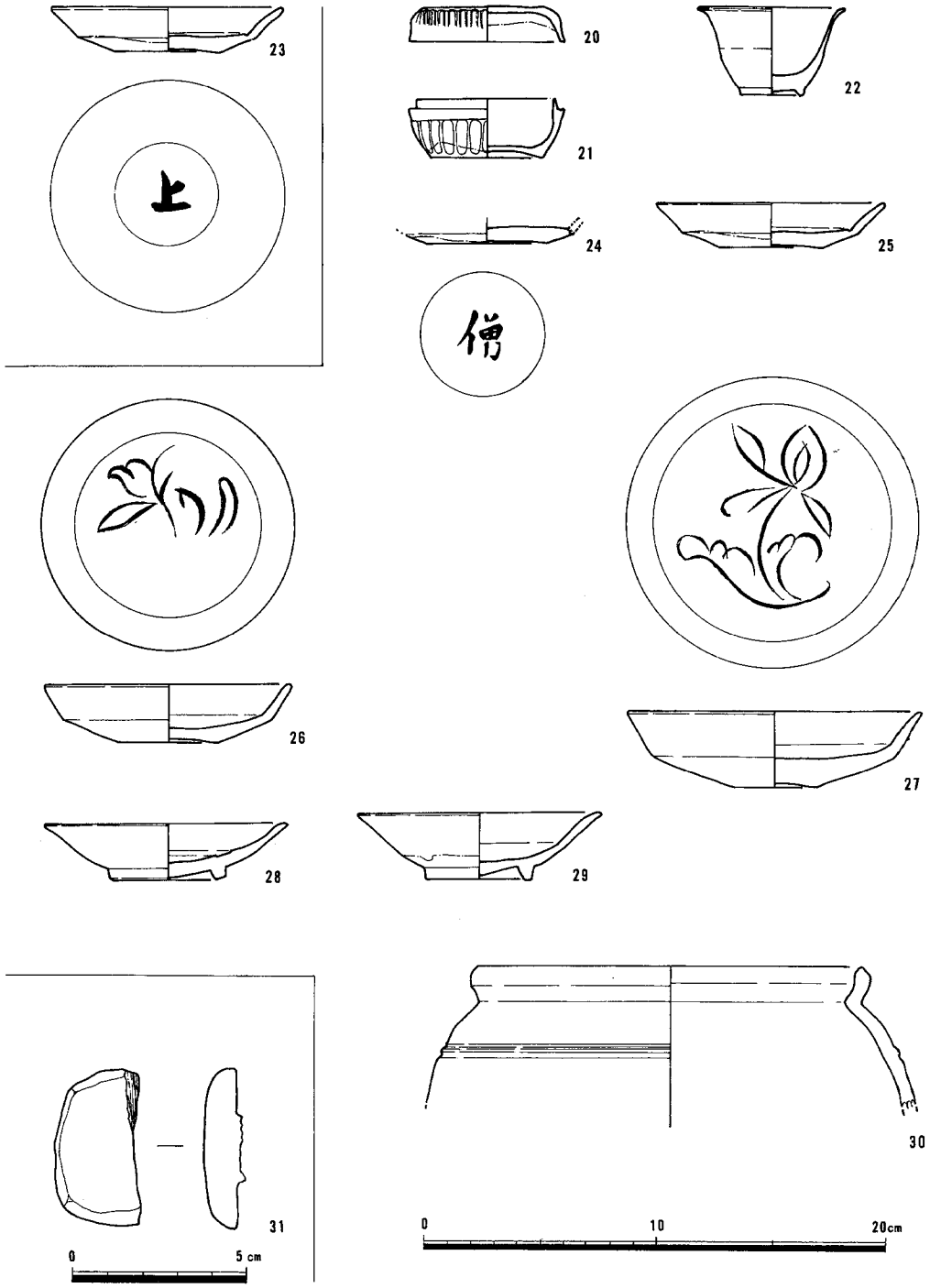
遺物は土師器片が少量出土している。

SD003（第４図・図版３）　調査区の東半部中央に位置し、SD001に並行する南北溝である。幅員0.8～１m、深さ0.1～0.2を測る。調査区が逆「く」の字型に折れ曲がっているため、直線的な溝の両端は調査区外に延びる。検出した長さは33mである。溝の壁は緩やかな弧を描きながら立ち上がる。調査区内において、他の小規模な溝と合流するが、これが坪の細分化を示しているのかは不明である。

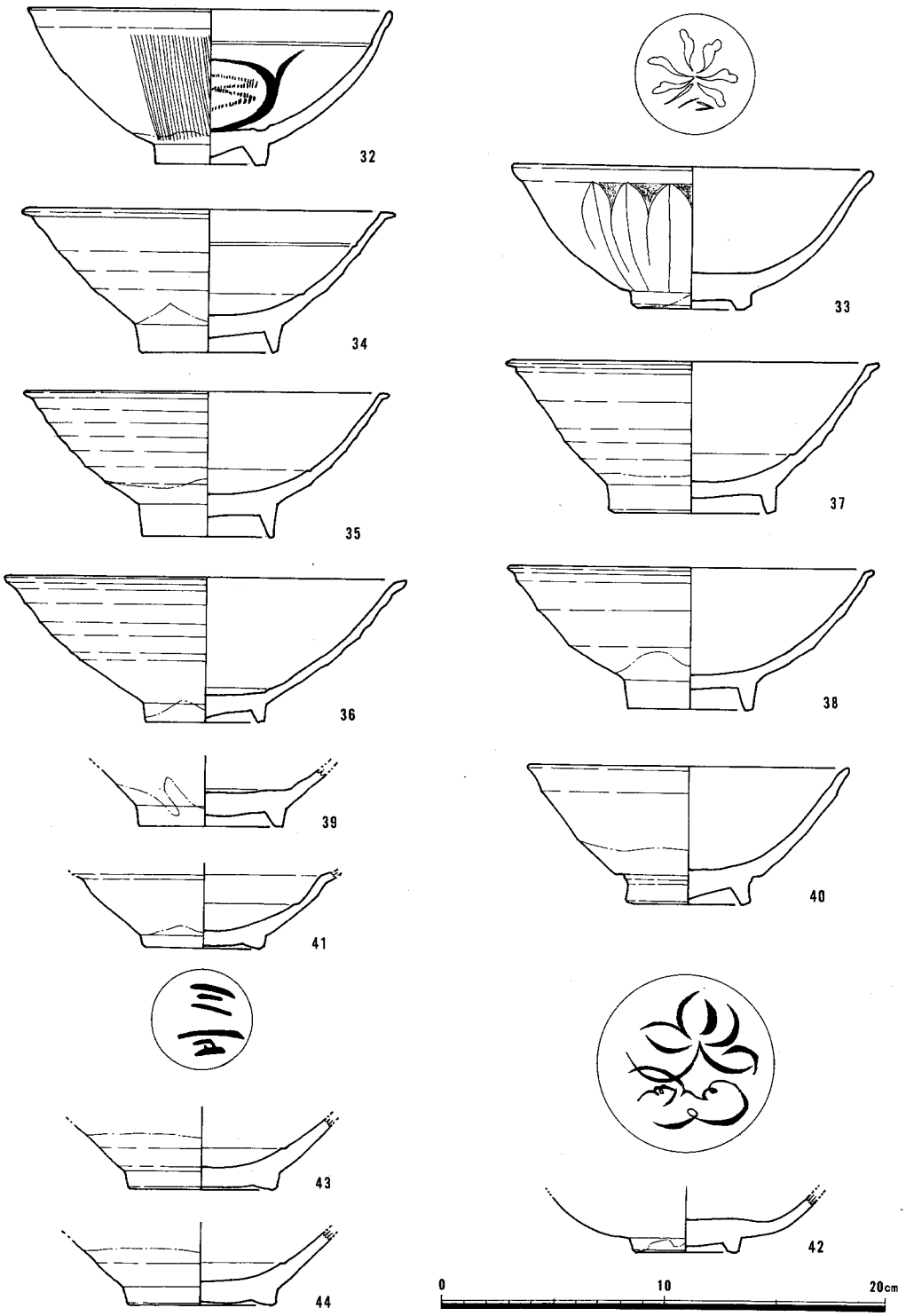
遺物は土師器片が少量出土している。



第7図　出土遺物実測図(1)（縮尺1/3）



第8図　出土遺物実測図(2)（縮尺1/2,1/3）



第9図　出土遺物実測図(3)（縮尺1/3）

3) 小結

田村遺跡群における埋蔵文化財調査、特に第５・７両次の調査において検出した中世の溝と現在の地形との位置関係から、遺構の溝は、方１町に大割りする土地区画に結び付くことが指摘されている。本調査においても、第５次調査で検出した北流する南北溝（SD100）の延長部を本調査内において部分的ながら確認することができた。本章では、今次調査の成果をまとめるとともに問題点を幾つか取り上げ、今後の周辺地域における調査研究を進めるための手がかりとしたい。

溝SD001の開削時期

第８次調査では３条の溝を検出した。SD001は、第５次調査で検出したSD001の延長部であることは、位置、規模、出土遺物から裏付けられよう。開削時期については、出土遺物から12世紀前半に比定され、溝の改修等の問題も考えられるが、基本的には第５次調査報告の所見と同じくする。

溝SD001の流路が示すもの

溝の有する機能としては、第一義的には水の送排水であり、副次的に土地の境界を示すことが考えられる。水路の形態は、土地区間の本来のあり方や、溝の第一義的目的を効率的に運用させることを考えると、直線的形態が機能的である。しかしながら、第５・８両次調査で検出された溝は、周辺地形が平坦でありながらも直線的とは言う難い形状で、蛇行や折曲を呈し、北流する。さらに、溝の土層断面の状況から、現水路は、その幅員を縮小させてはいるものの、本質的な形状は開削時を踏襲していることから、下層の中世の溝と現地形とは、連帯性の結果であることが今回の調査で明らかとなった。すなわち、現在の地形の祖型となる状態は、中世の早い段階で決定されたものと思われる。さらに、この中世溝と現地形（畦畔、水路）とが継続しながら重なりあう所見は、土地所有の形態について一つの仮説が考えられる。つまり、溝SD001をも含む一帯は、土地が細分されること無く、溝の流路に変形が生じた以降（12世紀以降）も、長期間にわたって個人（１団体）の所有であったことが考えられる。なぜならば、溝SD001を含む一帯が個人（１団体）の所有であるならば、溝の流れ、流路の変化に伴う耕地面積に変化が生じても問題は無いと考えられるからである。すなわち、現在の祖型となる土地区割りが成立した後も調査地一帯の所有者に変更が生じても、広範囲な土地を個人（１団体）が所有するという所有形態には変化が生じなかったことを示唆するものであろう。

今後の課題

溝は時代の経過と共に規模も変化しているが、これは、時代や社会が溝への要求量の変化を反映したものであろう。しかしながら、開削当初に求められていた機能、およびその質や量も不明である。現在の地形が中世に祖型を求められることについては明らかにしたが、溝の規模を変化させた社会要因を明らかにする必要があろう。

2. 第11次調査

1) 概要

田村遺跡群の第11次調査地点は第８次調査地点の北側に連続する部分である。道路予定地であるために幅６～７ｍ、長さ約110ｍの調査区を設定した。調査開始以前は農道、水田用水路があった。農道は幅３～４ｍ、用水路は幅２ｍ程度であった。農道上面は標高14.0ｍであり、用水路は最も深いところで0.8ｍの深さがあり、溝底は標高約13.2ｍを測る。農道と用水路の両側は一部に宅地と畑地があるものの、何れも造成により水田を埋め立てたものであり、近年まで水田であった。現在の水田面はこの農道、用水路を隔てて西側が標高13.95ｍ、東側が標高13.90ｍであり、僅かに西側が高い。

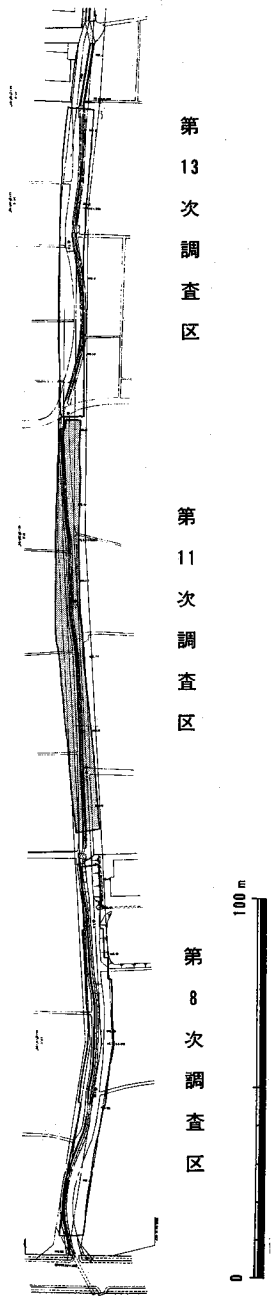
用水路は周囲の雨水が流れるために調査にあたって調査区西側に付け替えた。また、新設される道路予定範囲のうち隣接境界線に接する部分を安全のため50㎝程度残した。

調査はまず、道路面、用水路部分の表土、上部上層を重機により除去し、その後、人力により残存した客土や攪乱土の除去を行い、遺構の検出を進めた。

遺構検出を開始してまもなく調査区の全域にわたって南北方向の溝状遺構が現れた。この遺構をSD001とした。SD001は現代の用水路をほぼ並行し、切り合っている。1988年に調査された第８次調査溝SD100に連続するものとみられた。SD001は調査区内で約20ｍおきに縦断するトレンチを設けて、調査を行った。

つぎに調査区南側のSD001の東側では部分的に水田面らしい遺構を確認した。しかし、洪水砂による攪乱があり、面的広がりはつかめなかった。

なお、調査の最終段階に調査区南壁の土層確認を行う目的でトレンチを設けた。南壁は調査期間中に雨水のため上部が崩壊したため、当初の調査範囲より１ｍほど広げた位置に再度設けた。その際、溝SD001から東方向へ分岐する溝状遺構を確認した。この位置は現在の水田面に遺存する「条理遺構」の坪境にあたることや、土層観察などから溝SD001とほぼ同時期に設けられ機



第10図　第11次調査区位置
(1/2,000)

能した水路であったと判断し、溝SD004と付称した。その規模や形態は遺構が調査区境界にまたがり、且つ遺構確認前にトレンチ掘削を行ったために明確に把握できなかった。

また、調査区北側では溝SD001内埋土と、その周辺の基盤層である粗砂層に含まれて、鉄滓が出土した。周辺にトレンチを設けて調査を行ったが関連遺構は未検出であった。

2) 遺構と遺物

(1) 溝

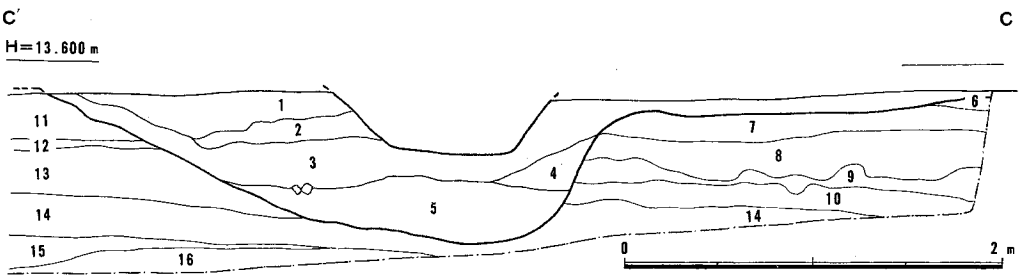
SD001（第11図） 溝は南側で広く北側にしたがい狭く、浅くなる。また溝は完全な直線でなく、緩く蛇行している。調査区の最も南側で幅4.1m、深さ0.5m、調査区中央付近で幅3.0m、深さ0.35mを測る。調査区北側では西側が調査区外に延びるために幅は不明であり、深さは0.3mとなる。断面形は緩いU字形もしくは東側が急な立ち上がりをもつ薬研掘状をなす。溝の底面は基盤の砂礫層に達している。溝内の埋土は砂層と砂礫層の互層であり、腐植土などの形成は認められなかった。埋没にしたがい次第に流路が西側に偏っていったとみられた。

溝内からは多くの遺物が出土した。遺物の取り上げに際して、上層と下層に区分した。また底面直上の埋土中の遺物を最下層として取り上げた。

a． 上層出土遺物（第12図）

12世紀の遺物を検出しており、13世紀まで降る遺物はみられない。

1は糸切り土師器小皿で、外面口縁下に1本の圏線が明瞭にめぐる。口径8.9cm。2～8は白磁で、2はわずかに青味をおびた釉薬が下半までかけられた皿であり、外面に放射状の刻線を、内面にも凹線が対応している。露胎の外面高台内には橙色を呈する円班状部分がみられる。3の皿は、わずかに緑色をおびる灰白色釉が高台直上までかけられ、口縁付近には釉垂れがある。口縁端を水平にまげ、内面に圏線をめぐらす特徴をもつ。4の皿も2とにた釉色で、うすい灰

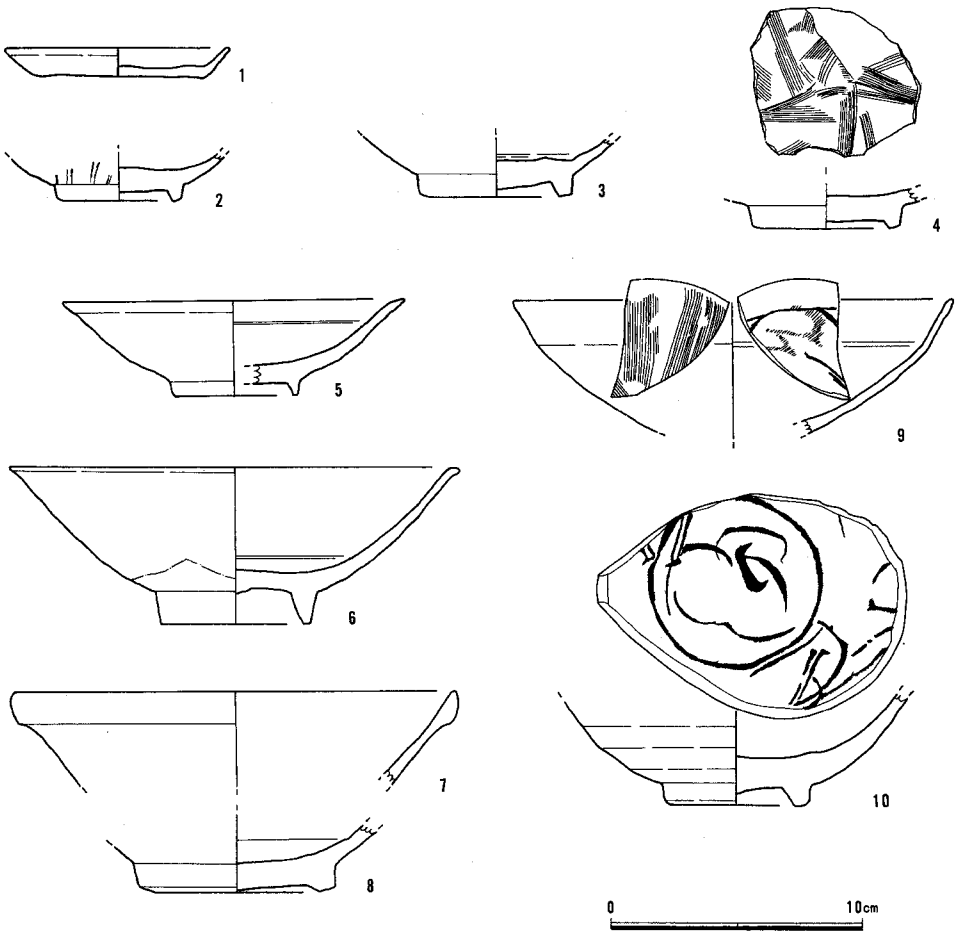


1 灰褐色粗砂（炭化物片含）
2 暗灰褐色砂礫
3 灰～黄灰色粗砂
4 灰～暗灰色細砂
5 黄灰色粗砂と灰褐色砂礫層理
6 黄褐色粗砂
7 暗灰褐色土（上面に足跡あり）
8 暗灰色細～微砂
9 暗灰色粘質土
10 灰褐色砂礫
11 灰褐色土
12 灰褐色細～微砂
13 暗灰茶色砂礫
14 灰白色中砂
15 灰白～暗灰色微～中砂層理（木片含む）
16 黄灰色粗砂

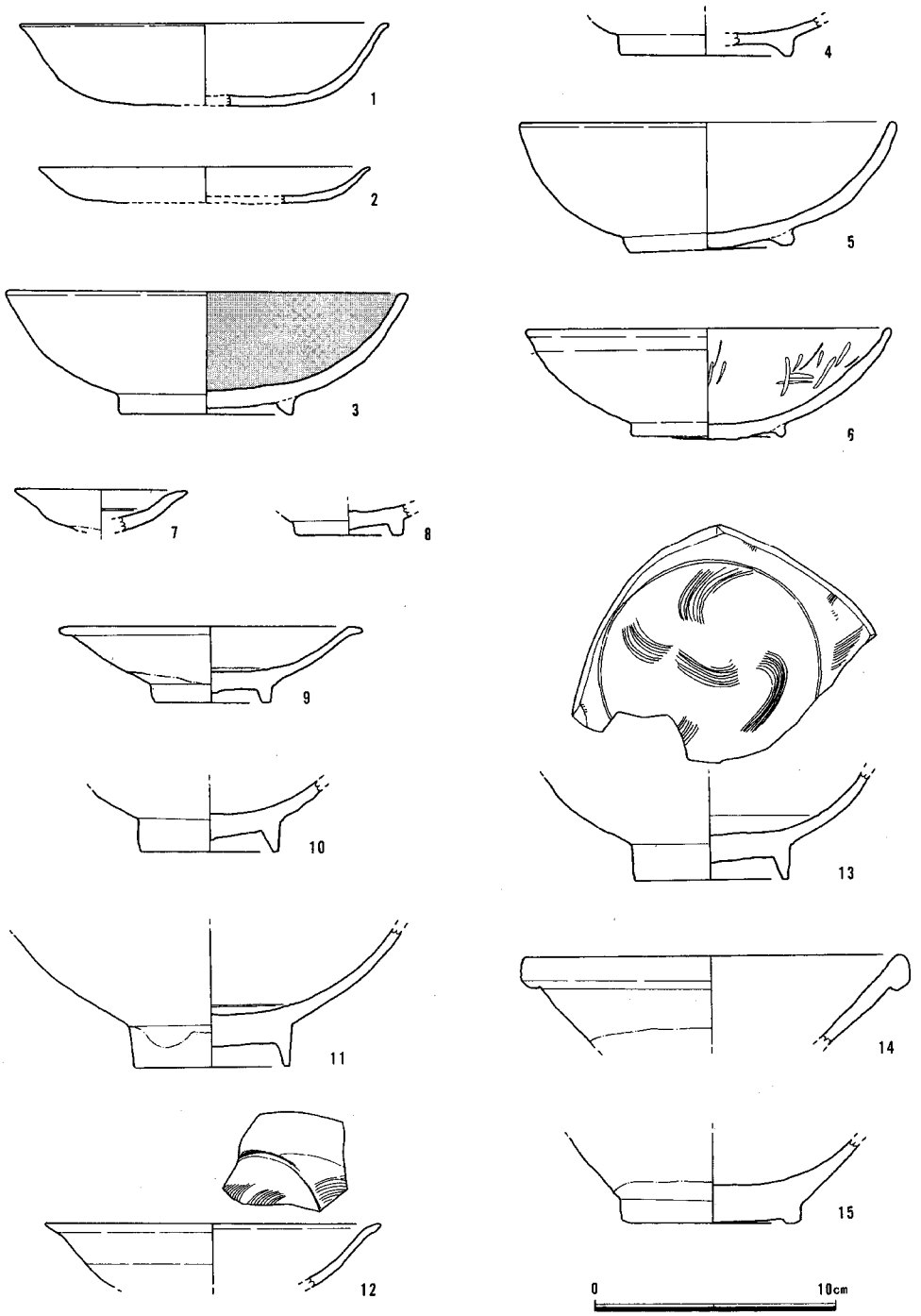
第11図 SD001土層断面実測図（1/40）

色の硬質な胎土である。内底を３本単位の線で５分し、各々を櫛線文でうめている。５の碗も同様な灰色胎土に透明釉がかけられ、内底を輪状に釉剝ぎ、その部分には白い砂が付着している。６は口縁端部をかるく外反させる碗で、内底に圏線をいれる。釉薬は体部中位以下を大きく露胎にし、内面の一部にも無釉部分がある。高台は直立し、高さ1.2cmをはかる。７、８は玉縁口縁碗であり、７の口縁肥厚部分は幅1.6cmとおおきい。８は内底に圏線を有し、高台内抉りは浅く、抉り部分径の底径に占める割合は0.83である。

９と10は青磁碗で、９は通有の櫛描文で透明度の高い青磁釉が黄緑色に発色し、細かい櫛目が外面に施文されている。10は、内面にヘラにより蓮華文を片切彫りする竜泉窯製品とみられるが、内外の凸部分の淡緑色釉がすべてカセた状態になっている。肉厚で露胎の高台には、兜



第12図　SD001上層出土遺物実測図（1/3）



第13図　SD001下層出土遺物実測図(1)（1/3）

巾状の削り出し部分にハマ跡とみられる黒点がかすかに付着している。

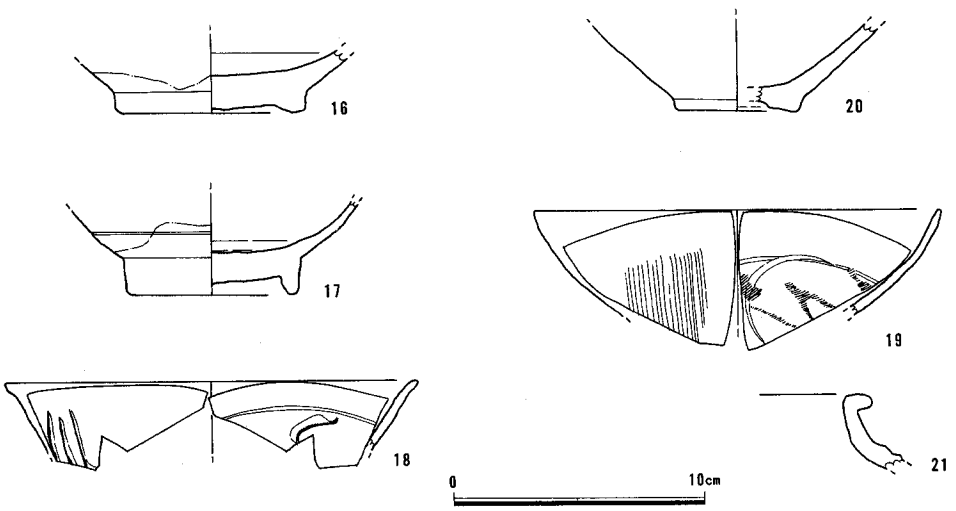
これらはいずれも12世紀の遺物であり、この溝の埋没年代は、12世紀後半と考える。

b．　下層出土遺物（第13・14図）

SD001上層とにた遺物組成である。

土師器の出土は少なく、１はヘラ切り底の杯で、体部はヨコナデ、内底部はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径15.4cm、器高3.4cm。２～６は瓦器皿・椀である。２の小皿は、ヨコナデの調整がみられる口縁部内外は黒色となり、底部はヘラ切りである。３～６の瓦器椀は、体部に稜がなく、口縁を肥厚させることもない形態である。３は、内面と外面は口縁下のみ燻され、肉厚で断面三角形の高台をつける。底部には板状圧痕をのこしている。４は内外ともに黒色で、直立高台である。５は、肉厚な体部に短い高台をつける。内面は黒色で、底は一方向の、口縁付近は水平方向の、いずれも雑なミガキが施されている。外面は、口縁付近は黒色、それ以下は灰色で、凹凸が多く、凸部にのみ申し訳程度のミガキがなされている。６は、内外ともに黒色を呈し、外面も、口縁付近のヨコナデ部分をのぞいて、粗雑ながらミガキが高台まで施されている。その高台は低いながらも、完整で、わずかに外反し、底は中央部で高台より下がっている。口径15.2、器高4.7cmをはかる。

７～17は白磁である。７～９は皿型品であり、８の内底は重ね焼きのために輪状に釉薬が剝ぎとられ、白い砂が付着する。９は口縁を水平にのばし、内底に鏡様に圏線をめぐらしている。高台以下は露胎で、灰白色釉がそれ以上にかけられている。10以下は碗で、10は高台内抉りを



第14図　SD001下層出土遺物実測図(2)（1/3）

やや斜めに削り、外底にうすく橙色をおびた円班の焼台痕がのこる。11は高い高台をもつタイプで、灰色をおびた白磁釉が滑らかに高台上までかけられ、内底中央に二重圏線が不明瞭ながらもみられる。12は内面にヘラと櫛による施文がみられ、わずかに緑色をおびた灰色釉がかかる。13も内面に櫛描文のあるタイプで、露胎の高台は直立で、1.6cmをはかる。14～16は玉縁状口縁の碗で、14では折り返しての肥厚状況が断面で観察できる。15と16の相違は、内底に圏線をめぐらすか否かである。このタイプは外底の抉りが浅く、底部厚さは体部の器肉の約２倍ある。17は内底を輪状に釉剥ぎする粗製白磁である。焼成後に畳付は研磨している。

18、19は青磁碗で、18の外面はヘラにより粗く綫条文をいれる。19は通有の同安窯系青磁であり、このほかに青磁で竜泉窯蓮弁文タイプは検出されていない。20は高麗青磁碗であり、高台幅1.1cmで、推定底径5.0cmであるので、外底抉り率は0.56の玉壁高台である。灰色の胎土に暗緑色の釉が内外のすべてにかけられ、畳付に目跡がのこる。21は褐釉壺の口縁部で、口には大きく砂目がのこる。

これらの出土遺物は、12世紀前半から後半におよんでいるが、その前後の時期のものは含んでいない。

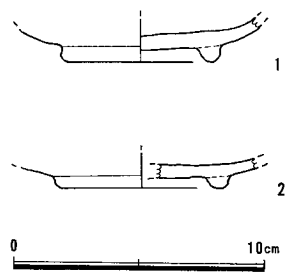
ｃ．　最下層出土遺物（第15図）

この層から検出できた遺物はわずかである。図示しえた１は瓦器椀の底部であり、丸みをおびた高台、内外面ともに黒色、内底には一方向のミガキが認められる。２は、やや硬質の土師器椀で底部にかなり強く板状圧痕がみられる。

ｄ．　その他の出土遺物（第16図）

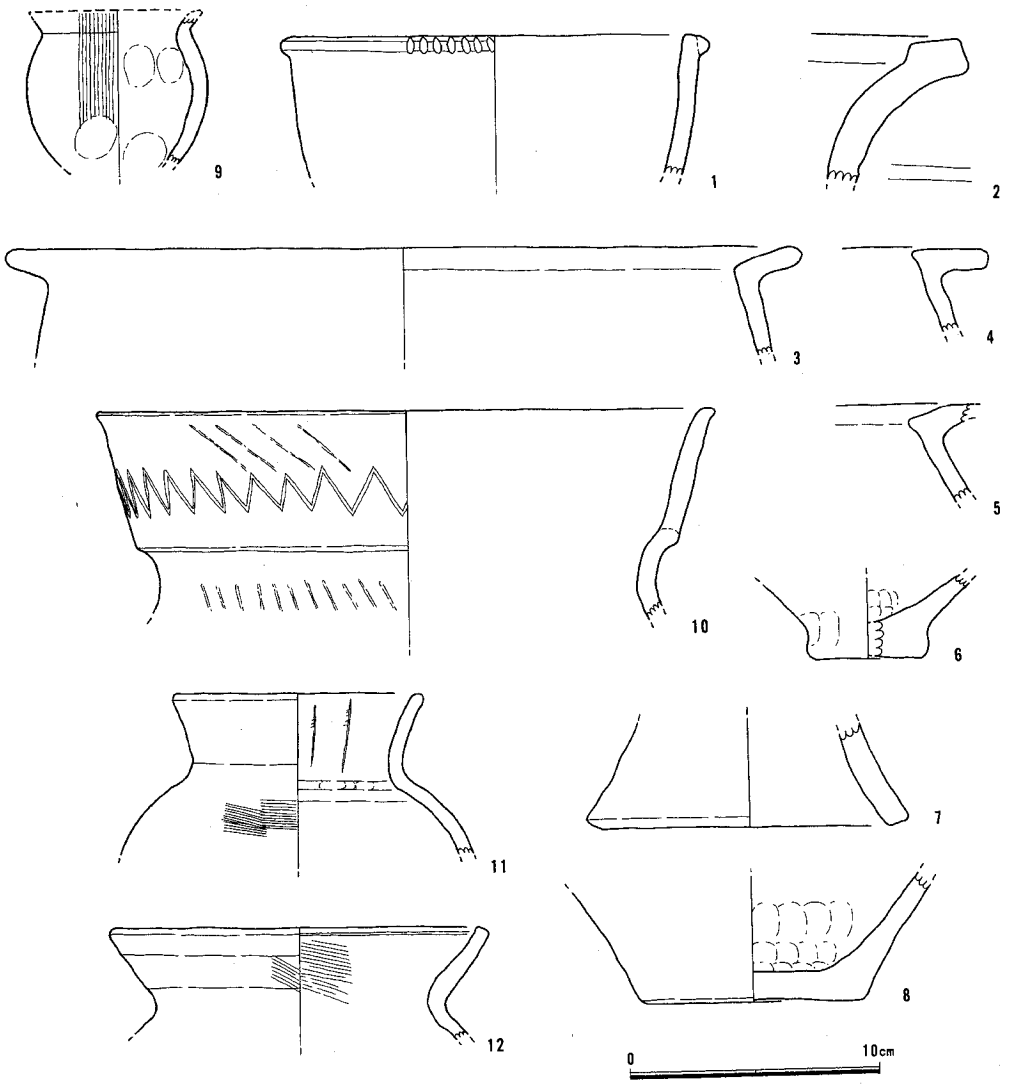
溝内からは中世以前の遺物も出土した。これらの多くは磨滅しており、流水などにより上流から流れ込んだものとみられた。遺物には土器類、石器類があるが、ここでは時期のわかる土器類について代表的なものを取り上げ報告する。

１は刻目突帯文土器である。口縁部にのみ突帯を一条張り付ける形式のもので、胴部中位から次第にすぼまる器形をもつ。突帯は口唇部外面に接して張り付けられている。破片であるが口径は17cm程度に復元される。２は壺の口縁部破片である。口縁部は強く外反し、頸部外面に沈線を施す。また口縁部内面に粘土帯を張り付け肥厚させる。口唇部は面取り状となる。３から５は甕の口縁部である。口縁部を強く折り、４、５は内側にやや引き出す。断面が「く」字形か鋤先状をなす。６は甕底部か蓋である。外面には指押さえが残る。７は器台の底部である。８は甕底部であり、底径約8.5cmを測る。９は小型の粗製土器であ

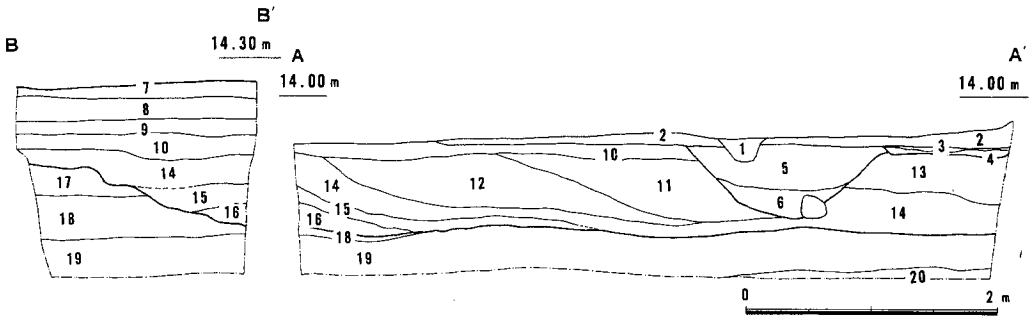


第15図　SD001最下層出土遺物実測図 (1/3)

る。口縁部は「く」字に外反する。口縁部と底部を欠損する。外面は縦ハケ、内面は指押さえで、器壁は薄い。10は土師器の二重口縁壺である。口縁は外反し、頸部の締まりはそれほど強くない。口縁部と頸部の外面にヘラ描きの鋸歯文と斜文が施される。口縁径は24.5cmに復元される。11は土師器の短頸壺である。口縁部内面と胴部外面にはハケ調整が残る。口径は約10cmである。12は土師器甕である。内外面にハケ調整が残り、内面のヘラ削りもやや荒い。口径は約14cmに復元される。



第16図　SD001出土遺物実測図（1/3）



1	カク乱	2	暗青灰色砂質土(造成土)	3	青灰色グライ
4	黄色粗砂	5	暗青灰色グライ	6	暗青灰色粗砂
7	暗黄褐色土	8	黒褐色土	9	黄灰褐色土
10	黄褐色中～細砂	11	暗灰色粗砂・細砂層理	12	暗灰色砂礫
13	黄褐色砂質土	14	暗灰色砂礫	15	灰白色粗砂・細砂層理
16	砂礫	17	暗灰色シルト	18	暗灰白色細砂
19	暗灰褐色粘土(泥質)	20	黄灰色中砂		

第17図　SD004土層断面図（1/60）

以上の遺物は土器様式として１・２・６が板付Ⅰ式から板付Ⅱ式に対応し（1、６の土器型式は夜臼式である)、弥生時代前期前～中葉に位置付けられる。３～５、７～９が須玖Ⅱ式に対応し、弥生時代中期後半から末葉に位置付けられる。10～12が布留式中～新段階に対応し、古墳時代中期に位置付けられるものである。

SD004（第17図）

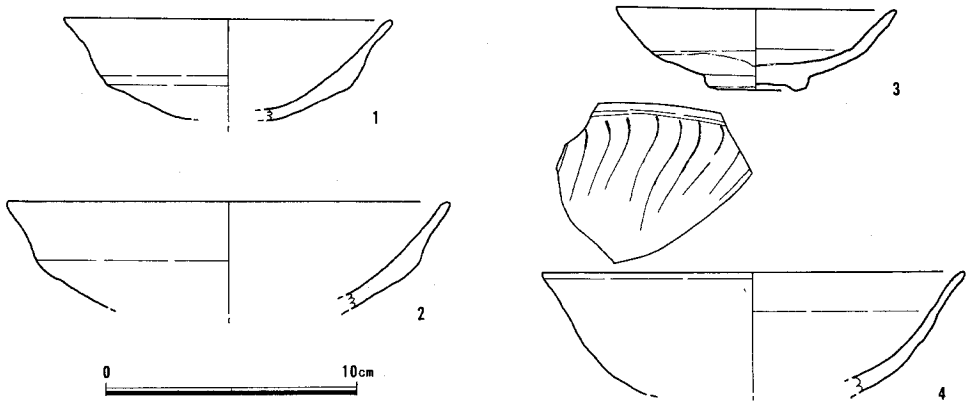
概要の中で記したように調査区南端で検出した。規模や形態は不明であるが、北側の溝壁面を確認した。方向はおおよそ東西に向き、溝幅は1.2m以上、深さは0.45m以上である。溝内埋土がSD001と連続していることから両者はほぼ同時に埋没したものとみられる。

(2)　水田跡

調査区南側のSD001の東側では部分的に水田面らしい遺構を確認した。これは灰白色の細砂層に覆われていたものである。足跡状の凹凸が調査区内の広範囲に認められた。また土層観測でも溝SD001東側岸に沿って僅かな高まりを確認し畦畔の可能性を認めた。こうした点から水田面が遺存していると判断し、この部分の調査を進めた。しかし、細砂層が安定して堆積している範囲は狭い。他は粗砂を混えた洪水砂が、下位層を攪乱しており、面的広がりはつかめなかった。足跡状の凹凸も保存状態は良くなかった。細砂層の直下から白磁、瓦器椀などの遺物が少量出土した。

出土遺物（第18図）　１、２の瓦器椀はほぼ同形であり、体部中位で明確な稜をもって反転させ、その部分以下は器肉を厚くつくる。２では内外面ともにミガキがなされ、口縁直下の凹部ではヨコナデ調整がのこる。口縁内外が黒色で、他は灰色である。３は白磁皿、白色透明釉が体部中位までかかり、露胎の外底内抉り部分には、わずかながら砂の付着が認められ、黄変

している。内面に圏線をいれ、段をつけている。４の白磁碗は、外面に捩り線文をいれるタイプで、灰白色の釉薬がかけられている。



第18図　水田跡出土遺物実測図（1/3）

3) 小結

以上第11次調査の報告を行った。本調査区の南に位置する第８次調査の成果とも重複するが、簡単なまとめを行いたい。調査区中央に検出された溝SD001は８次調査SD100の延長にあたり、ほぼ同じ方向に設けられている。これは早良平野に残る条理状遺構の区画に沿ったものであり、水田用水路として設けられたものとみられる。SD004はSD001からさらに分水する用水路であり、その規模は小さい。SD001と同様の遺構は、若干時期が下るが早良平野南部の重留、清末、岩本、四箇船石遺跡群などでも確認されている。早良平野では南北方向へ幾筋も大規模な幹線用水路を設け、さらに東西方向に支線用水路を設けて水田へ引水していたものと考えられる。これらの溝は中から出土した遺物からみて、12世紀後半に下半部分がほぼ埋没してしまったものとみられた。なお、SD001の東側では同時期の水田面とみられる遺構を確認した。この水田面の標高は13.35ｍであったが、同じ高さでみると溝の西側には水田面はなく、土層観察から少なくともこの地点では約15cm上の標高13.50ｍ付近に同時期の水田面があったと考えられる。こうした点からこの付近の水田への灌漑用水は南から北へと共に、西から東へと送っていたと考えられる。

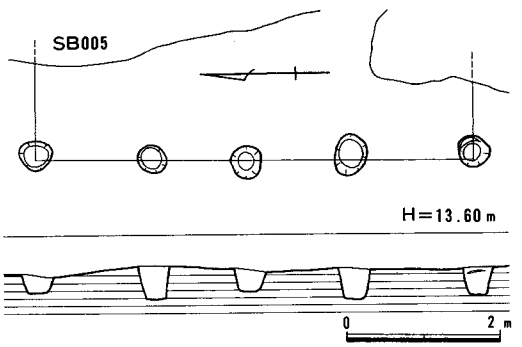
溝内からは遺物が出土したが、８次調査に比べて量が少ない。これは、８次調査の南側に隣接して田村遺跡の中心地があり、ここからの流入遺物が距離が離れるほど少なくなるためとみられる。なお、田村遺跡は古代から中世にかけて早良平野中部の中心的集落であり、さきの大規模な水田開発と無関係とは考えにくい。こうして点については今後の調査に期待される。

3. 第13次調査

1) 概要

本調査地は第11次調査地の北側に位置し、東西に水田が広がる農道、水路に沿った南北方向の調査区である。南側での基本層序は水田耕作土、床土、遺構面である黄褐色土弱粘質土と続く。この黄褐色土弱粘質土は比較的薄く、西側で５～７cm、東側で２～４cm程である。現況でも東側水田面の方が西側に比して10cm程度低く、東側では削平が大きい。また、黄褐色土弱粘質土の下層に淡黄褐色土砂質土が10～15cm程見られ、更に下層は淡茶褐色粗砂混じりの礫層へ移行する。なお、北側では黄褐色土弱粘質土が削平を受け、その下層の淡黄褐色土砂質土が遺構面となる。遺構面の標高は12.6～13.2ｍを測り、北側に緩く傾斜する。調査面積は581m²である。

検出した遺構は平安時代前半の掘立柱建物、土坑、溝、ピット及び平安時代末～鎌倉時代の溝で、この溝は第８・11次の延長である。遺構は南側に集中しており、北側では削平が著しくその密度は薄い。

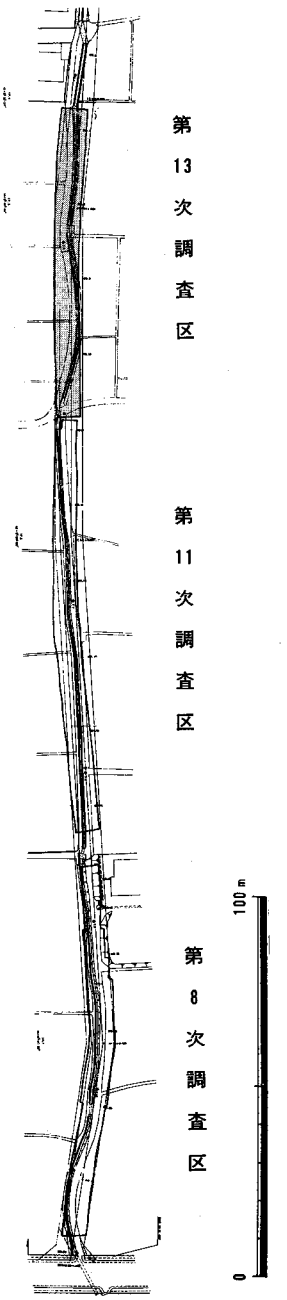


第20図　SB005実測図（1/100）

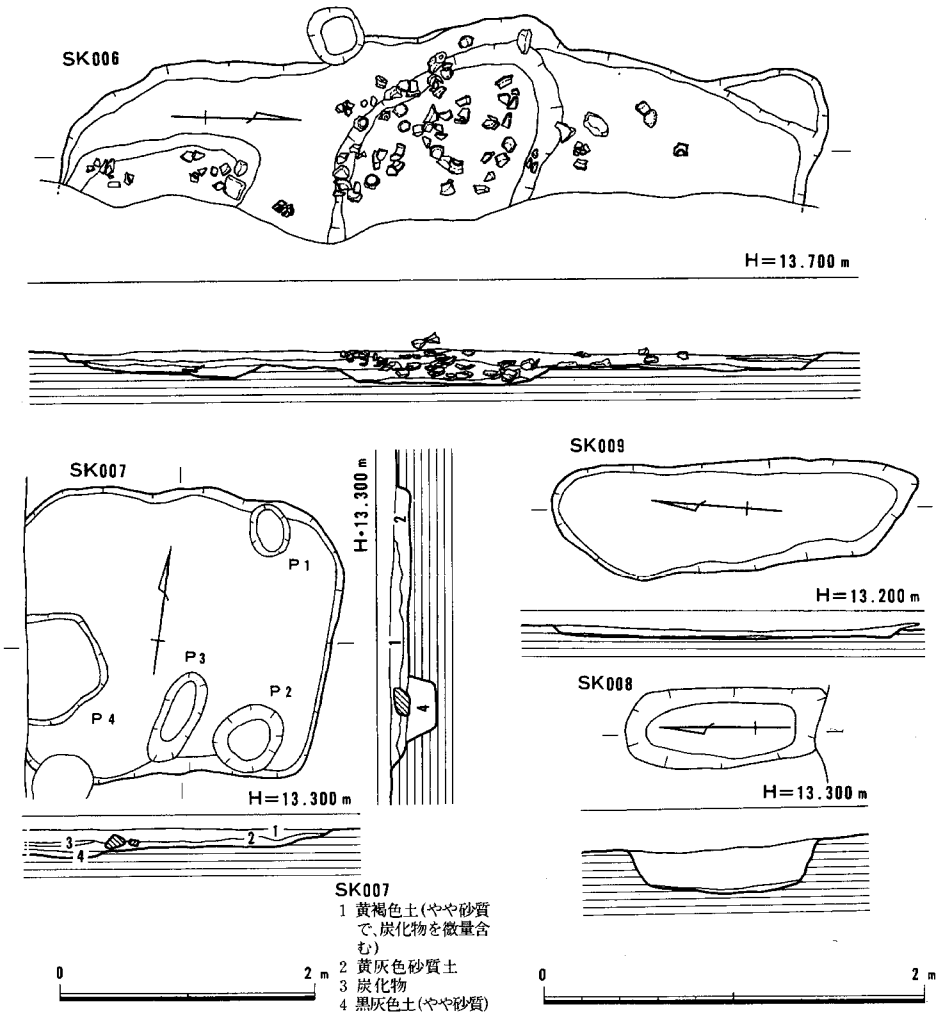
2) 遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

SB005（第20図）　調査区の南側に位置し、南北方向の柱筋を確認した。東側をSD001及びＳＫ006に切られ全容を明確にし得ないが、梁間或いは桁行４間の側柱建物と推定される。



第19図　第13次調査区位置図（1/2,000）

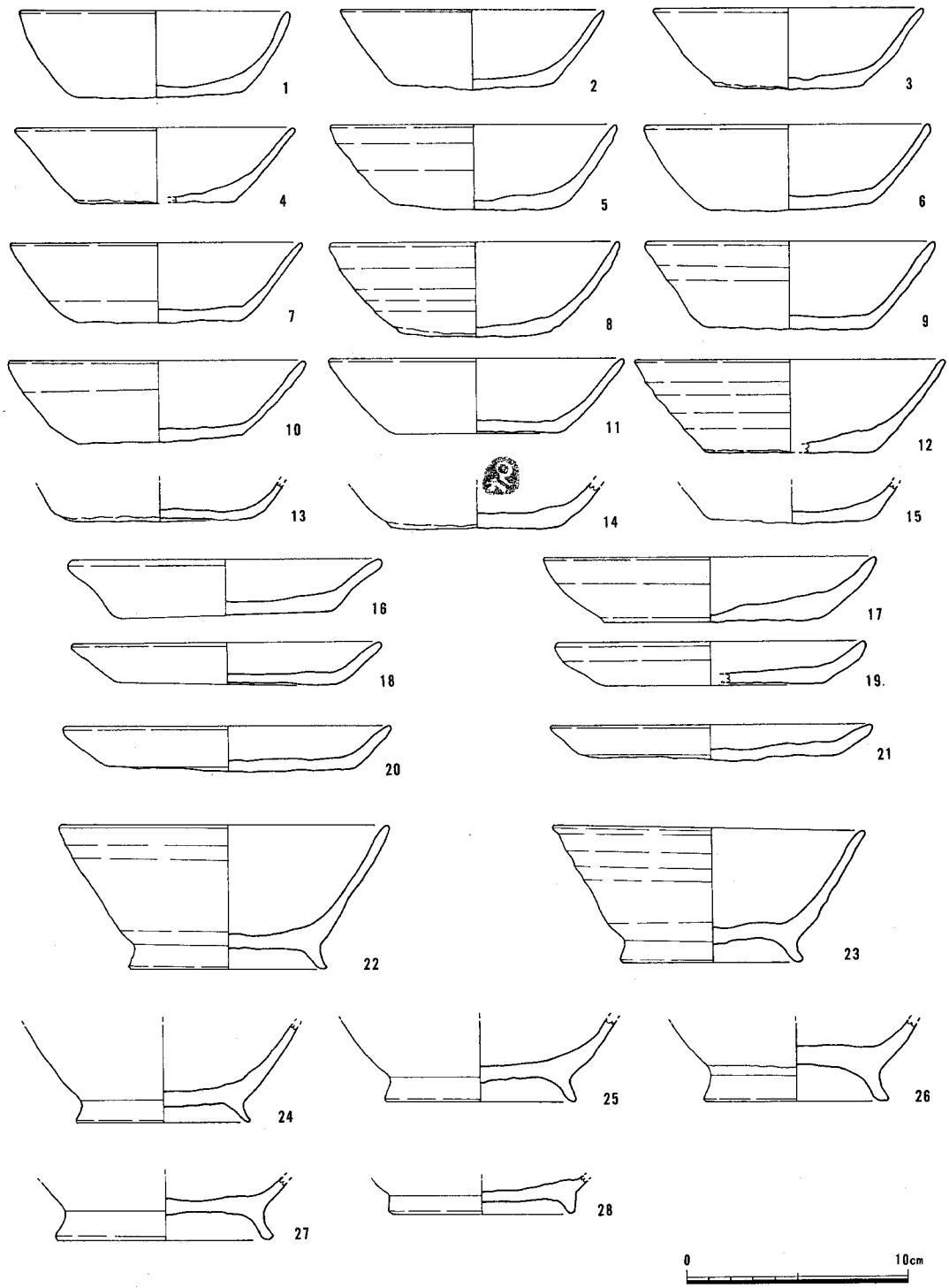


第21図　SK006・007・008・009実測図（SK008は1/40,他は1/60）

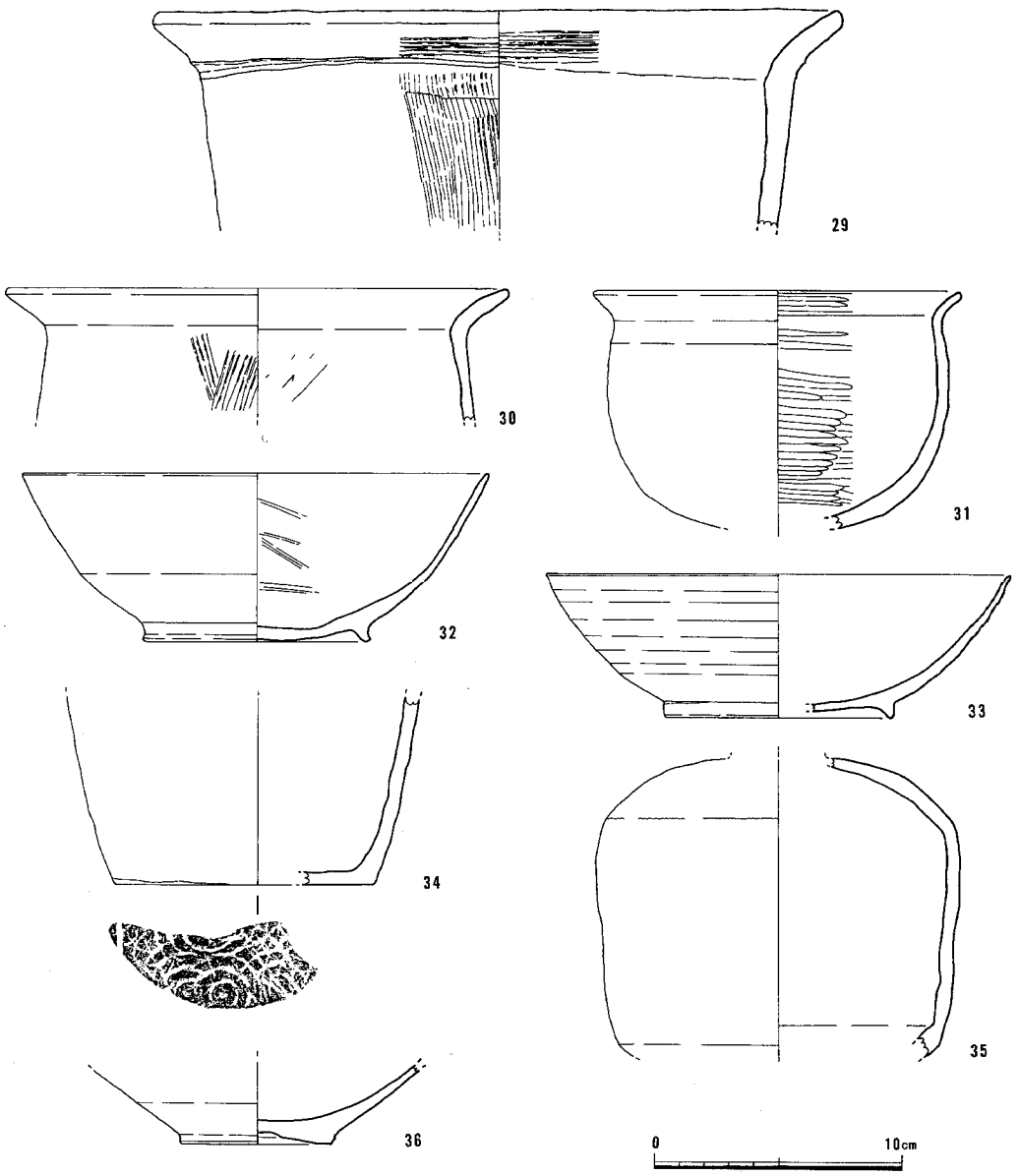
柱筋の全長は5.7m、柱間は1.3～1.5mを測り、中央の２間の柱間が両側よりも狭い。柱穴は略円形で、径40～55cm、深さは25～40cmである。覆土は茶褐色土を主体とする。各柱穴から遺物が出土しており、土師器坏・埦・甕、須恵器等の細片が含まれる。

(2)　土坑

SK006（第21図）　調査区の西側に位置し、東側をSD001に切られる。現存で長さ6.0m、幅1.5mを測る。深さ0.1mの平坦面の中央部と南端に深さ0.1～0.15mの不整形な掘り込みを有する。その掘り込み中及びその上位を中心として多量の遺物が出土した。特に中央部では遺物の集中が著しい。９世紀後半の所産と考えられる。



第22図　SK006出土遺物実測図(1)（1/3）

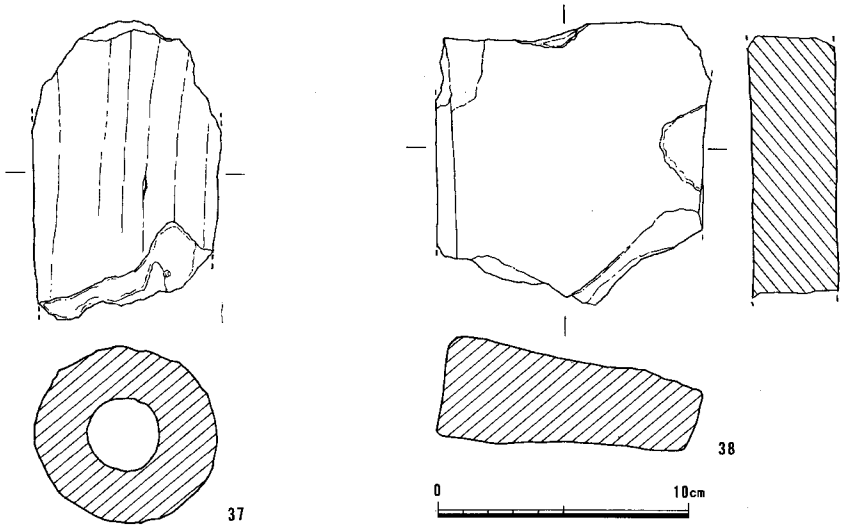


第23図　SK006出土遺物実測図(2)（1/3）

出土遺物（第22～24図）　土師器坏・皿・椀、黒色土器A類、須恵器、越州窯系青磁等がある。なお、出土遺物の一部については後頁に法量一覧表を掲げた。

土師器

坏（1～15）　全て外底部にヘラ切り痕を残し、1・2・4・11・13・14には板状圧痕を有



第24図　SK006出土遺物実測図(3)（1/3）

する。口径は11.6～13.8cm、器高は3.4～4.3cm、底径は6.8～7.6cmを測る。底部は略平坦で、直線的に延びる体部を主体とし、やや丸味を帯びた体部を有するもの（1・8）も見られる。調整は一部磨滅するものも含まれるが、体部内外面をヨコナデ、内底部をナデる。色調は淡黄橙色を呈するものが大半であるが、8・12は赤橙色である。12は口径、器高共に大きく、胎土は精良である。11、14の内底部には「×」印のヘラによる刻線、スタンプが施される。

皿（16～21）　外底部はヘラ切りを残し、16・20・21には板状圧痕が認められる。口径は13.6～14.8cmを測り、器高の高いもの（16・17）のうち16は体部を外反させ、17は内湾気味に立ち上がる。器高の低いもの（18～21）では緩い外反する体部を有するもの（18・20・21）、体部の上位で屈曲するもの（19）に分けられる。調整は磨滅のため不明瞭なものが多いが、17・20では体部内外面にはヨコナデ、内底部にはナデが施される。色調は16・17が赤橙色、他は黄橙色である。

埦（22～28）　器形の全容が判明するものは22・23のみで、他は体部の大半を欠く。平坦な底部に断面台形の細い高台部を有し、直線的な体部を有する。28の高台部は垂直に近く低い、他は外向する比較的高いものである。全て外底部にはヘラ切り痕を残す。体部及び高台部内外面はヨコナデ、内底部はナデが施される。色調は黄橙色を呈する。

甕（29・30）　「く」の字状に外反する口縁部を有する。29は復元口径27.2cmを測り、体部外面及び口縁部内外面には縦、横方向の刷毛目を施し、口縁端部には横方向のナデが加えられる。体部内面はヘラ削りを荒くナデ消す。外面頸部には幅の不定な沈線が認められる。外面は黒茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多量に含む。30は復元口径20.0cmを測り、やや張り出す体部を有

する。体部外面は縦、斜方向の刷毛目、内面はヘラ削り、口縁部内外面はナデである。色調はにぶい橙色を呈し、胎土には砂粒を少量含む。

黒色土器A類

甕（31）　復元口径14.4cmを測る。丸底の底部から丸味を帯びた胴部、ややすぼまった頸部へと続き、外反する口縁部を有する。黒灰色を呈する内面は横方向のヘラ磨き、外面は底部をヘラ削りし、他にはヨコナデが施される。

埦（32・33）　土師器埦と比すると高台部が低く、体部は丸味を帯びる。内底部にはヘラ切り痕を残す。32は復元口径18.4cm、器高6.8cmを測る。高台端部はやや外方に張り出し、内外はナデる。体部には回転ヘラ削りが施され、稜線より上位はヨコナデを加える。内面は黒褐色を呈し、ヘラ磨きする。33は復元口径18.4cm、器高5.7cmを測る。高台部内外をナデ、丸味を帯び口縁部まで延びる体部には回転ヘラ削りの後、ヨコナデを施す。内面は器面が一部剝離し、磨滅するが、ヘラ磨きが認められる。

須恵器

壺（34・35）　34は平底の底部から直線的に立ち上がる体部を有する。外底部には同心円状の叩き痕が残り、体部外面にも格子目状の叩き痕が見られるがナデ消される。内面には回転ナデが施される。35は張り出す肩からすぼまる頸部へと続く。磨滅が著しく、焼成は軟質である。

越州窯系青磁

碗（36）　灰白色の胎土の全面に淡緑色の釉が施釉され、蛇の目高台を有する。外底部には目跡が認められる。

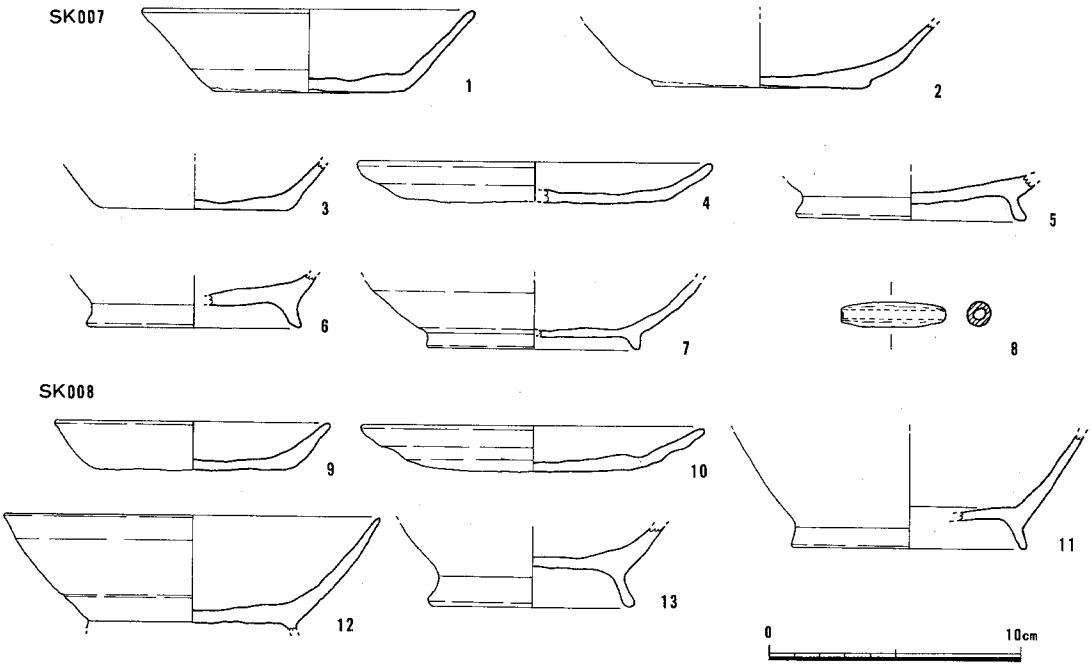
鞴羽口（37）　径7.2cm、孔径2.8cmを測り、両端部は欠失する。外面には面取りが施され、稜を有する。外面の一部が二次的加熱により淡灰色に変色する。胎土には砂粒を多量に含む。他にも細片が1点出土した。

砥石（38）　砂岩製の置き砥石で、両端部を欠く。両面を砥面として、利用する。

なお、他に出土遺物として鉄滓があり、その出土総重量は1.2kgである。また、その鉄滓の一部については分析を依頼し（付論参照）、鍛錬鍛冶滓であるとの結果を得ている。

SK007（第21図）　SK006の西に位置する隅丸方形の竪穴状の土坑で、西側の一部は調査区外に延びる。幅2.2m、深さ0.15mを測り、長さは2.5m程と推定される。平坦な床面にはＰ１～Ｐ４の掘り込みを有し、各深さは20、40、20.5cmを測る。Ｐ４は浅い凹み状を呈する。

出土遺物（第25図１～８）　１～３は土師器坏である。外底部にはヘラ切り痕を残し、２・３には板状圧痕が認められる。１は復元口径12.8cm、器高3.4cmを測り、外底部にはヘラによる「×」印の刻線を有する。直線的な体部の内外面はヨコナデ、内底部にはナデが施される。４は皿で、復元口径13.8cmを測る。体部は緩く外反する。外底部はヘラ切りで、体部内外面をヨコナデ、内底部はナデである。５・６は土師器坏で、体部の大半を欠失する。SK006出土のも



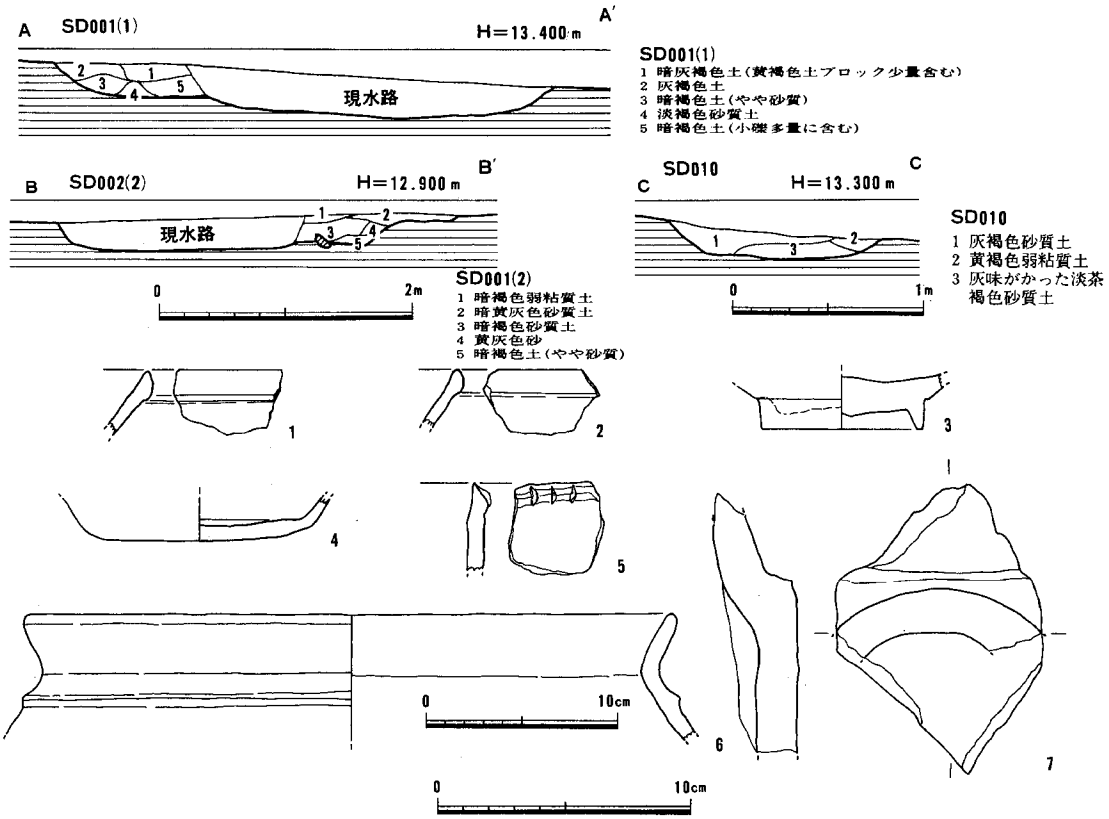
第25図　SK007・008出土遺物実測図（1/3）

のに比して低い外向する高台部を有する。共に外底部にはヘラ切り痕を残し、５には板状圧痕が認められる。７は低い高台部を有する黒色土器A類埦である。体部外面下半には回転ヘラ削り、内面にはヘラ磨きが施され、外底部はナデる。８は土錘で、端部を一部欠失する。長さ4.2cm、最大径1.0cmを測る。他には土師器、須恵器の細片及び鉄滓が少量出土している。

SK008（第21図）　SK007の北に位置する小規模な隅丸長方形の土坑である。長さ1.0m、幅0.4m、深さ0.25mを測り、覆土は茶褐色土である。

出土遺物（第25図９～13）　全て土師器で、９は復元口径10.6cm、器高2.0cmを測る坏である。外底部にはヘラ切り痕を残し、板状圧痕を有する。体部内外面はヨコナデ、内底部にはナデを施す。底部から体部への立ち上がりは丸味を帯びる。10は皿で、復元口径13.4cm、器高1.9cmを測る。外底部にはヘラ切りを残し、板状圧痕が認められる。内外面共に磨滅する。11～13は直線的な体部を有する埦で、外底部にはヘラ切り痕を残す。11・13は底部片で、11は体部への屈曲が鋭い。12は復元口径14.6cmを測り、高台部を欠失する。体部外面には回転ヘラ削りを施し、ヨコナデを加える。内面器面は大半が剥離する。他に土師器甕等の細片が少量ある。

SK009（第21図）　調査区の中央南寄りに位置する。不整な隅丸長方形を呈し、長さ2.9m、幅0.85mを測り、深さは0.05mと浅い。覆土は淡褐色を呈し、黄褐色土のブロックを含む。出土遺物には土師器坏、埦等の細片が少量ある。また鉄滓が３点出土し、内１点について分析を



第26図　SD001･010土層断面図　(1/60,1/40) 及びSD001出土遺物実測図　(6は1/4,他は1/3)

依頼し（付論参照）、SK006と同様に鍛錬鍛冶滓との結果を得ている。なお、他の２点の鉄滓は指先程の小振りなものである。

(3)　溝

SD001（第26図）　第８・11次調査から延長する溝で、幅３～４ｍ、深さ15～20cmを測る。この溝に重複する様に現存の水路が掘削されており、遺構の遺存状況は極めて悪い。また、この水路は最近改修されており、最深部が遺構の底面以下に達している。なお、遺構面の削平により溝は調査区北端より15ｍの地点で消失する。この第13次調査地の１町（約109ｍ）西では第７次調査（II・III区）が行なわれ、同様の南北方向の溝が検出されているが、本調査地で見られたように削平により著しく損なわれている。

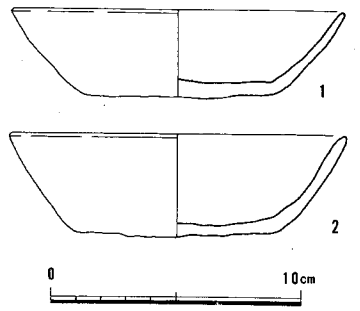
出土遺物（第26図１～７）　遺物量は第８・11次に比すると少量で、大半が磨滅した細片である。この状況は上述した第７次調査と類似する。１～３は白磁碗片である。１・２は玉縁状の口縁部を有する。白色の胎土に１には灰白色、２にはやや黄味がかった白色の釉が施される。３は底部片で細身の高台部を有し、外面は直に削り出す。底部の器肉は厚手である。淡灰オリ

ーブ色の釉が一部高台部外面に釉垂れする。胎土は灰白色を呈する。4は須恵器坏で、底部と体部の境は丸味を帯びる。内外面共に磨滅するが、外底部にはヘラ切り痕が不明瞭ながら認められる。焼成はやや軟質である。5は刻目突帯文土器で、上方に尖る口縁端部下に突帯を貼り付け、ヘラ状工具による刻みが施される。口縁部内面はナデにより凹む。胎土には多量の砂粒を含む。6は弥生土器甕で復元口径33.8cmを測る。「く」の字状の口縁部の下に断面三角形の突帯を巡らせる。内外面共に磨滅が著しい。7は玉縁式の丸瓦で、磨滅するが凹面に微かに布目が認められ、シボリ痕が残る。灰白色を呈する。4～7は混入品と考えられる。他に鉄滓が出土しており、その総重量は1.6kgである。

SD010（第26図）　調査区の南端に位置する。東側は調査区外に延び、西側は現存の水路に切られる。幅1.2m、深さ0.15mを測り、断面は浅い逆梯形をなす。出土遺物には少量の土師器、白磁の細片の他に鉄滓が総重量で1.5kg出土した。

(4)　その他の遺物（第27図1・2）

1・2は土師器坏で遺構検出時に採集した遺物である。共に外底部にはヘラ切り痕を残し、平坦な底部から直線的な体部へと続く。順に復元口径13.0、13.6cm、器高3.5、4.1cmを測る。内外面共に磨滅するが、体部内面にはヨコナデが認められる。



第27図　遺構検出面出土遺物実測図（1/3）

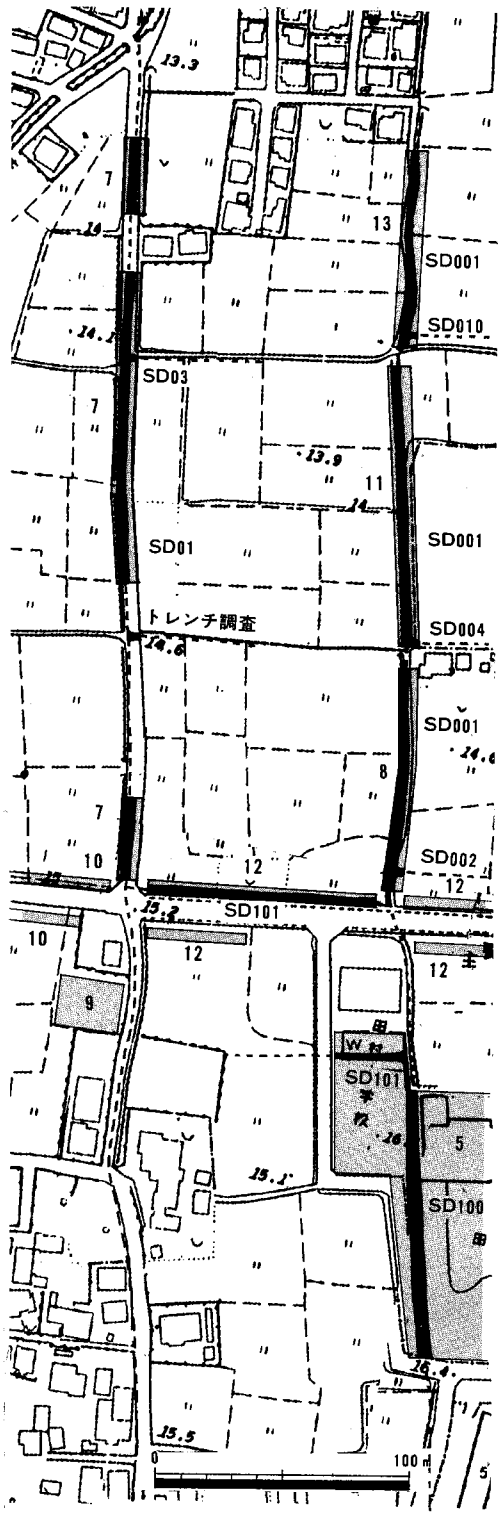
遺物番号	器種	口径	器高	底径	遺物番号	器種	口径	器高	底径・高台径
1	坏	(11.8)	3.9	7.6	15	坏	——	——	7.2
2		(11.6)	3.6	(7.4)	16	皿	(13.6)	2.6	9.8
3		(12.0)	3.6	6.8	17		(14.8)	2.9	9.6
4		(12.2)	3.4	(6.8)	18		13.8	1.9	10.0
5		(12.6)	3.8	(7.6)	19		(13.8)	1.9	(10.0)
6		12.7	3.8	7.3	20		14.4	2.1	10.9
7		(12.8)	3.6	7.2	21		14.3	1.7	11.5
8		(12.8)	4.2	(6.8)	22	椀	14.5	6.5	8.7
9		12.9	4.0	7.4	23		(13.8)	6.2	10.0
10		13.0	3.8	7.2	24		——	——	9.6
11		(13.0)	3.4	(7.4)	25		——	——	(8.4)
12		(13.8)	4.3	7.6	26		——	——	10.1
13		——	——	8.2	27		——	——	(9.6)
14		——	——	(7.8)	28		——	——	8.0

第2表　SK006出土遺物法量一覧表　　単位はcm、（　）は復元

V. 結　語

今回報告した第８次・11次・13次調査において検出された遺構は平安時代前半と平安時代末から鎌倉時代との２時期に大別される。前者の遺構は第13次調査区の北側で確認された掘立柱建物、土坑群が該当し、９世紀後半～10世紀前半に位置付けられる。SK006は９世紀後半の廃棄土坑と考えられ、良好な一括遺物が出土した。該期は第１次調査で10世紀の土坑が数基確認されているのみで、本遺跡内では不明確な時期であった。また、それらの一部の遺構からは鉄滓が出土し、分析の結果（付論参照）、鍛錬鍛冶滓との報告を受けている。第11次・13次の境界付近の東側水田では耕作中に多量の鉄滓が出土したとの所有者の話もあり、製鉄遺構を含む該期の集落が第13次調査区周辺に広がっている可能性が高い。

３調査区で検出されたSD001を初めとして他の遺構は後者の時期の所産である。SD001の詳細については前述されているため、ここでは本遺跡内の条理地割に重複或いは関連のあると考えられる溝の位置関係について記述を行う。第28図は現在までに判明している該当の遺構を模式的に示したもので、南北方向の主水路（第７次SD01、第５次SD100、第８・11・13次SD001）から分岐する東西方向の分水路（第５次SD101、第７次SD03、第７次トレンチ、第８次SD002、第11次SD004、第12次SD101、第13次SD010）という有機的関係が看取される。主水路が１町単位に貫流するのに対し、分水路は第５次SD101の様に半町位置にも認められ、また直線的でなく鈎状を呈する。地形的制約が第一因であると思われるが、用・排水路の機能差に起因するものとも考えられる。



第28図　田村遺跡溝配置図（1/3,000）

付論　田村遺跡第13次調査出土鉄滓の金属学的調査

大澤　正己

概要

古代に属する土坑より出土した２点の鉄滓を調査して次の事が判った。鉄滓は、鍛冶炉の炉底に堆積した椀形状鉄滓で鍛冶滓に分類される。１つは欠損部をもつが256ｇの中型品で、折返し曲げ鍛接の高温作業の排出物、残り１点は同じく端部を欠ぐ52ｇの小型品で鉄素材を鉄器に成形後熱処理を行なう際に酸化防止に粘土汁を灌ぐ加工時の派生物である。２点共地元砂鉄を始発原料とした鉄素材が使用されている。

1.いきさつ

田村遺跡は福岡市早良区大字田に所在する。1978年の第１次調査以降17次調査までなされているが、調査区域のいずれかの土坑から鉄滓が出土していた。今13次調査で比較的多量に出土した009と006の土坑の鉄滓について遺跡の性格を解明する目的から金属学的調査を行なった。

2.調査方法

２－１.供試材

２点の調査鉄滓の履歴と調査項目をTable.1に示す。

Table.1　供試材の履歴と調査項目

符号	試料	出土位置	推定年代	計測値		調査項目		
				大きさ(mm)	重量(g)	顕微鏡組織	ビックース断面硬度	化学組成
TAMR-1	鉄滓	009	平安時代	78×51×38	256	○	○	○
TAMR-2	鉄滓	006　３区	平安時代	65×50×21	52	○	○	○

２－２.調査方法

(1)　肉眼観察

(2)　顕微鏡組織

鉄滓は水道水で充分に洗浄乾燥後、中核部をベークライト樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1,000と順を追って研磨し、最後は被研面をダイヤモンドの３μと１μで仕上げて光学顕微鏡観察を行なった。

(3) ビッカース断面硬度

鉄滓中の鉱物組成の同定を目的として、ビッカース断面硬度計 (Vickers Hardness Tester) を用いて硬さの測定を行なった。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡試料を併用した。

(4) 化学組成

鉄滓の分析は次の方法で行なった。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第1鉄 (FeO) ：容量法。

炭素 (C)、硫黄 (S) ：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素 (SiO_2)、酸化アルミニウム (Al_2O_3)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K_2O)、酸化ナトリウム (Na_2O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO_2)、酸化クロム (Cr_2O_3)、五酸化燐 (P_2O_5)、バナジウム (V)、銅 (Cu) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer
：誘導結合プラズマ発光分光分析。

3.調査結果と考察

3－1.TAMR-1 鉄滓

(1) 肉眼観察

表皮は赤褐色を呈し平坦面に気泡を露出して荒れの少ない肌を有する。又、赤錆と粘土被膜をかぶり、端部に木炭痕を残す。裏面は青灰色の粘土を付着し、木炭痕と反応痕をもった厚みのある椀形滓である。鍛冶炉の炉底の形状をそっくり反映した滓である。上面の両端部を欠損するが復元可能の形状であった。中型椀形品で256 g を計る。

(2) 顕微鏡組織

Photo.1の①～③に示す。鉱物組成は白色粒状のヴスタイト (Wüstite:FeO) が大量に凝集し、その粒間に淡灰色盤状のファイヤライト (Fayalite:$2FeO \cdot SiO_2$) と暗黒色ガラス質スラグの極く少量から構成される。当組織は鉄器製作時に鉄素材を赤熱鍛打し、折返し鍛接の高温作業時に排出される。又、廃鉄器の再生材としての加熱時の排出に伴なう事もありうる。後者の場合は精錬鍛冶滓と分類することもあろう。一応ここでは鍛錬鍛冶滓で挙げておく。

(3) ビッカース断面硬度

Photo.1の③にヴスタイト (Wüstite:FeO) 粒の硬度測定の圧痕写真を示す。硬度値は412Hv

である。ヴスタイトの文献上の硬度値は450～500Hvである。①該品は若干低目の412Hvであるが、バラツキの範囲内としてヴスタイトに同定できよう。

(4) 化学組成

Table.2に示す。検鏡組織でヴスタイト (Wüstite:FeO) 凝集をみた様に鉄分が多く、ガラス質成分の少ない鉄滓である。すなわち、全鉄分 (Total Fe) が65.05%に対して金属鉄 (Metallic Fe) は0.09%、多くは酸化第１鉄 (FeO) の59.91%で、これに酸化第２鉄 (Fe_2O_3) の26.30%が加わる。ガラス質成分 ($SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$) は6.623%と少なく、このうちの塩基性成分 ($CaO+MgO$) は0.81%と低値は精錬鍛冶には分類できない。更に、砂鉄特有元素の二酸化チタン (TiO_2) 0.90%、バナジウム (V) 0.13%、酸化ジルコニウム (ZrO_2) 0.47%、酸化マンガン (MnO) 0.09%と組合せて考えるとやはり精錬鍛冶滓でなく鍛錬鍛冶滓的成分である。

他の随伴微量成分についても特異な点はなく、酸化クロム (Cr_2O_3) 0.232%、硫黄 (S) 0.03%、五酸化燐 (P_2O_5) 0.27%、銅 (Cu) 0.001%であった。

３－２.TAMR-2　鉄滓（鍛錬鍛冶滓）

(1) 肉眼観察

茶褐色を呈する偏平状三角形に近い椀形滓の欠損品である。表面は平坦で小気泡を露出し、木炭痕を残す。また、ガラス化した部分も認められた。裏面も平坦状で鍛冶炉は浅底状と推定される。肌は赤褐色で局部的に木炭痕を有していた。

(2) 顕微鏡組織

Photo.1の④～⑧に示す。鉱物組成は淡灰色長柱状のファイヤライト (Fayalite:$2FeO \cdot SiO_2$) 主体で、これに白色小粒のヴスタイト (Wüstite:FeO) と、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。

⑥⑦に白色板状にヴスタイトが晶出して、一見鍛造剥片（赤熱鉄素材を鍛打した際に表面酸化被膜が剥離する）に思われるが、よくみると違っていて擬似鍛造剥片状とも呼べるヴスタイト晶出である。

該品は、恐らく鉄素材から鉄製品に成形されて酸化防止に粘土汁を塗られて加熱された時点の滓であろう。椀形滓としても欠損品であるが52ｇと小型品で滓の量としても少ない。

(3) ビッカース断面硬度

Photo.1の⑧にファイヤライト (Fayalite:$2FeO \cdot SiO_2$) の硬度測定を行なった圧痕写真を示

す。硬度値は540Hvである。ファイヤライトの文献硬度値は600～700Hvである[②] 遺跡出土鉄滓のファイヤライト硬度値は幾分低め傾向に出てくるので、この程度の値であればファイヤライトと同定できる。

(4) 化学組成

Table.2に示す。全鉄分（Total Fe）は48.87%に対して、金属鉄（Matallic Fe）が1.25%、酸化第１鉄（FeO）22.69%、酸化第２鉄（Fe_2O_3）は多くて42.87%の割合である。錆化鉄を含む滓である。ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）は18.43%と左程多くない。このうちの塩基性成分（CaO＋MgO）は1.30%である。

砂鉄特有元素の二酸化チタン（TiO_2）0.22%、バナジウム（V）0.02%、酸化ジルコニウム（ZrO_2）0.04%らは低値で、酸化マンガン（MnO）も0.10%と少ない。鍛錬鍛冶滓に分類される。

他の随伴微量元素らは、酸化クロム（Cr_2O_3）0.201%、硫黄（S）0.04%と通常であるが五酸化燐（P_2O_5）のみは0.57%と高めである。単なるバラツキか、木炭起因か、それとも高燐素材の使用があったのか気がかりな値である。銅（Cu）の0.004%は砂鉄成分の範囲である。

4.まとめ

田村遺跡第13次調査の土坑出土鉄滓は、ジルコン（Zr）含有から、地元低チタン含有砂鉄系鉄素材を使った鍛冶作業の排出滓に想定された。鍛冶は鉄器製作最終工程の鍛錬鍛冶である。鉄滓を出土した土坑（009、006）近くに鍛冶工房があって鉄器製作がなされたと推定される。調査鉄滓は鍛冶炉の炉底に堆積した椀形滓であった。

注

① 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』

符号	硬度測定対象物	硬度実測値	文献硬度値※1
	Fayalite (2FeO・SiO_2) ※2	560,588	600～700Hv
	磁鉄工 ※2	513,506	530～600Hv
	マルテンサイト ※2	641	633～653Hv
	Wüstite（FeO）※3	481,471	450～500Hv
	Magnetite（Fe_3O_4）※4	616,623	500～600Hv
	磁鉄鉱 ※5	563,506	458～613Hv
	亜共析鋼（C：0.4%）※6	175	160～213Hv

※1 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968他。
※2 滋賀県草津市野路小野山遺跡出土遺物 7C末～8C初
※3 兵庫県川西市小戸遺跡出土鍛冶滓 4C後半
※4 新潟県豊栄市新五兵衛山遺跡出土砂鉄製錬滓 Ulvösplhel 平安時代
※5 大阪府東大阪市西之辻16次調査出土錆造鉄斧 古墳時代前期
※6 埼玉県大宮市御蔵山中遺跡鉄鏃 5C中頃

② ①と同じ

Table.2　鉄滓と鉄塊系遺物の化学組成

試料番号	遺跡名	出土位置	種別	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化硅素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K_2O)	酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐素 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	酸化ジルコン (ZrO_2)	造滓成分	造滓成分 Total Fe	TiO_2 Total Fe	注
YAMA−1	山崎古墳群第2次	C-1号墳　墳丘表土	精錬鍛冶滓	6C末〜7C	53.70	0.25	52.76	17.79	14.38	3.41	1.68	0.69	1.74	0.533	0.21	1.73	0.164	0.06	0.27	0.02	0.23	0.003	1.39	22.433	0.418	0.032	①
YAMA−2	山崎古墳群第2次	C-1号墳前庭	精錬鍛冶滓	6C末〜7C	51.62	1.34	39.89	27.56	15.25	3.74	1.39	0.59	0.563	0.188	0.17	1.40	0.083	0.08	0.24	0.03	0.16	0.001	1.12	21.721	0.421	0.027	①
YAMA−3	山崎古墳群第2次	C-1号墳羨道R-97	砂鉄精錬滓	6C末〜7C	48.53	0.17	46.25	17.74	17.37	4.11	2.91	0.72	0.963	0.398	0.34	3.84	0.201	0.03	0.25	0.01	0.42	0.002	2.53	26.471	0.545	0.079	①
YAMA−4	山崎古墳群第2次	C-1号墳閉塞R-95	精錬鍛冶滓	6C末〜7C	52.19	0.36	37.87	32.02	12.87	3.69	1.11	0.66	0.463	0.130	0.15	1.79	0.196	0.07	0.19	0.02	0.31	0.002	0.94	18.923	0.363	0.034	①
YAMA−5	山崎古墳群第2次	C-1号墳閉塞R-96	鉄塊系遺物	6C末〜7C	49.83	0.51	25.80	41.84	17.11	3.84	0.65	0.37	0.473	0.145	0.06	0.34	0.013	0.03	0.18	0.02	0.06	0.002	0.19	22.588	0.453	0.007	①
TAMR−1	田村13次	TMR-13　009	鍛錬鍛冶滓	9C後半	65.05	0.09	59.91	26.30	4.05	1.69	0.39	0.42	0.048	0.025	0.09	0.90	0.232	0.03	0.27	0.02	0.13	0.001	0.47	6.623	0.102	0.014	②
TAMR−2	田村13次	TMR-13　0063区	鍛錬鍛冶滓	平安	48.87	1.25	22.69	42.87	12.13	4.54	0.82	0.48	0.280	0.180	0.10	0.22	0.201	0.04	0.57	0.03	0.02	0.004	0.04	18.430	0.377	0.005	②
2M−831B	田村2次	第2地点SC02	鍛錬鍛冶滓	鎌倉	53.8	−	54.1	16.80	15.82	6.24	2.17	0.85	−	−	0.10	0.25	Nil	0.016	0.32	0.19	0.008	0.013	−	25.08	0.466	0.005	③
E−853	田村5次	第10地点　1区SD-100	鍛錬鍛冶滓	鎌倉	60.8	−	57.7	22.81	12.44	3.16	0.87	0.40	−	−	0.08	0.12	Nil	0.14	0.33	1.41	0.007	0.005	−	16.87	0.278	0.002	④
UME−1	梅林	A区東南隅段落	砂鉄製錬滓	5C後半〜6C中	54.7	−	57.1	14.68	13.46	3.01	1.22	0.66	0.52	0.078	0.30	3.69	0.19	0.043	0.018	0.06	0.33	0.005	−	18.948	0.346	0.068	⑤
UME−2	梅林	C区羨道前面トレンチ埋土中	含鉄鉄滓	5C後半〜6C中	52.5	−	1.65	73.2	11.20	4.36	0.07	0.03	0.015	Nil	0.03	0.12	0.01	0.202	0.026	0.95	0.008	0.003	−	15.675	0.299	0.002	⑤
UME−3	梅林	C区羨道内覆土	含鉄鉄滓	5C後半〜6C中	44.6	−	2.23	61.2	22.18	5.52	0.08	0.13	0.052	Nil	0.01	0.19	0.01	0.142	0.047	0.69	0.003	0.019	−	27.962	0.627	0.004	⑤
V−901	内野原田	排滓場	鉄塊系遺物(錆化)	10C	54.34	1.06	5.12	70.49	7.00	1.87	0.49	0.11	0.357	0.064	0.10	0.96	0.152	0.042	0.415	0.30	0.236	0.001	−	9.891	0.182	0.0176	⑥
V−902	内野原田	排滓場	砂鉄製錬滓	10C	53.08	0.46	42.57	27.92	11.77	3.30	2.05	0.93	0.636	0.123	0.23	2.68	0.472	0.058	0.232	0.10	0.562	0.003	−	18.809	0.354	0.0504	⑥
V−903	内野原田	排滓場	鉄塊系遺物(錆化)	10C	42.28	0.38	10.54	48.20	21.80	5.88	0.66	0.33	1.00	0.216	0.08	0.73	0.186	0.083	0.210	0.35	0.154	0.001	−	29.886	0.706	0.0165	⑥
V−904	内野原田	排滓場	砂鉄製錬滓	10C	50.55	0.94	20.92	47.68	9.99	2.57	0.46	0.69	0.496	0.108	0.36	5.87	0.556	0.050	0.356	0.20	0.320	0.003	−	14.314	0.283	0.1161	⑥
UTNH−1	内野原田	排滓場	砂鉄製錬滓	10C	45.89	0.28	47.33	12.61	16.39	5.40	1.38	1.01	0.873	0.163	0.40	8.50	0.486	0.05	0.18	0.01	0.41	0.002	1.27	25.216	0.549	0.185	⑥
KEZ−1A	クエゾノ	1号墳袖製鉄炉	砂鉄製錬滓	10C？	42.02	1.87	45.40	6.95	21.5	5.16	3.36	0.96	1.11	0.16	0.62	7.76	0.27	0.041	0.25	0.14	0.27	0.004	−	32.25	0.767	0.1846	⑦
KEZ−5A	クエゾノ	5号墳周溝	精錬鍛冶滓	10C？	64.04	2.20	68.75	12.01	6.69	1.78	2.12	0.92	0.43	0.11	0.28	1.41	0.29	0.013	0.21	0.05	0.55	0.002	−	12.05	0.188	0.0220	⑦
HGI4−1	東入部4次	010	精錬鍛冶滓	9C頃	52.97	0.32	47.56	22.42	15.0	5.82	2.56	1.38	0.885	0.335	0.12	1.16	0.27	0.03	0.27	0.26	0.23	0.002	1.0	25.98	0.490	0.0219	⑧
HGI4−2	東入部4次	035	砂鉄製錬滓	9C頃	49.03	0.21	51.45	12.62	14.1	3.30	4.42	0.96	1.02	0.215	0.42	4.60	0.31	0.02	0.25	0.10	0.25	0.002	3.5	24.015	0.490	0.0938	⑧
HGI4−3	東入部4次	042	砂鉄製錬滓	9C頃	38.83	0.16	42.74	7.79	28.9	7.58	3.25	1.44	1.51	0.557	0.20	1.44	0.12	0.02	0.37	0.10	0.26	0.002	1.5	43.237	1.1135	0.0371	⑧
HGI4−4	東入部4次	057	砂鉄製錬滓	9C頃	47.17	0.21	34.97	28.28	19.6	4.35	2.04	0.76	1.22	0.547	0.15	1.15	0.17	0.01	0.36	0.09	0.15	0.002	0.5	28.517	0.6046	0.0244	⑧
HGI4−5	東入部4次	059	砂鉄製錬滓	9C頃	63.48	0.33	69.08	13.52	7.78	1.92	1.41	1.04	0.455	0.125	0.18	1.40	0.23	0.01	0.22	0.11	0.30	0.002	1.5	12.23	0.1927	0.0221	⑧
HGI4−6	東入部4次	018	精錬鍛冶滓	9C頃	63.83	0.24	67.21	16.23	5.84	1.98	0.98	0.72	0.193	0.058	0.27	2.83	0.52	0.01	0.19	0.06	0.38	0.002	1.4	9.771	0.1531	0.0443	⑧

Table.2の注
①大澤正己「山崎古墳群第２次調査出土鉄滓の金属学的調査」『山崎古墳－第２次調査－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第380集　福岡市教育委員会1994
②大澤正己「田村遺跡第13次調査出土鉄滓の金属学的調査」『田村遺跡Ⅸ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第384集　福岡市教育委員会1994
③福岡市教育委員会『田村遺跡Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集　1984
④福岡市教育委員会『田村遺跡Ⅴ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第192集　1988
⑤大澤正己「梅林前方後円墳出土鉄滓の金属学的調査」『梅林古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書第240集　福岡市教育委員会1991
⑥福岡市教育委員会報告書準備中　担当　池田祐司氏
⑦福岡市教育委員会報告書準備中　担当　常松幹雄氏
⑧大澤正己「東入部４次調査出土鉄滓の金属学的調査」『東入部遺跡群Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第381集　福岡市教育委員会1994

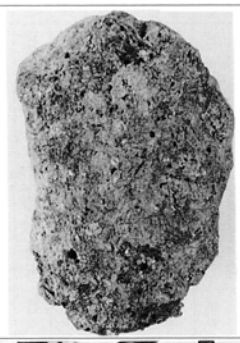
(1)TAMR－1
田村遺跡　13次
009　出土
鍛錬鍛冶滓

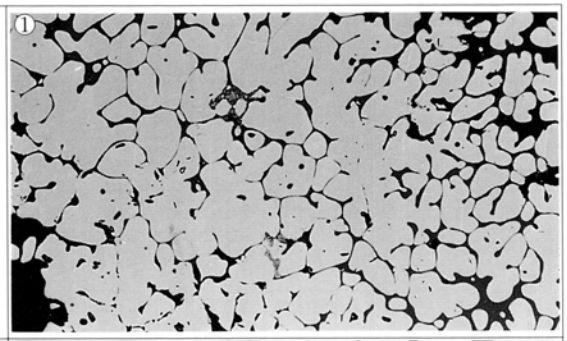
① ×100 Wüstite

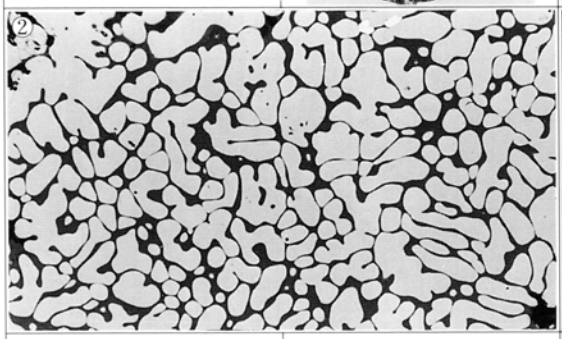
② ×100 Wüstite

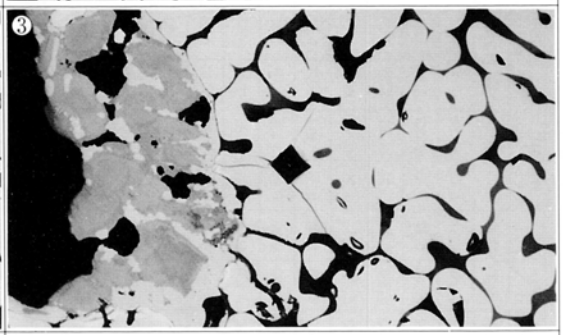
③ ×200 硬度圧痕 412Hv荷重200 g

外観写真　1／1.7









(2)TAMR－2
田村遺跡　13次
006　3区出土
鍛錬鍛冶滓

④ ×100 Wüstite

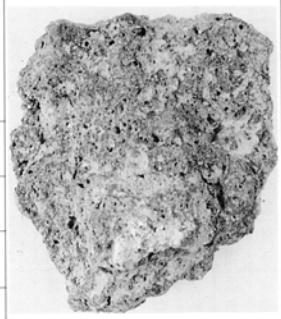
⑤ ×400 ④拡大

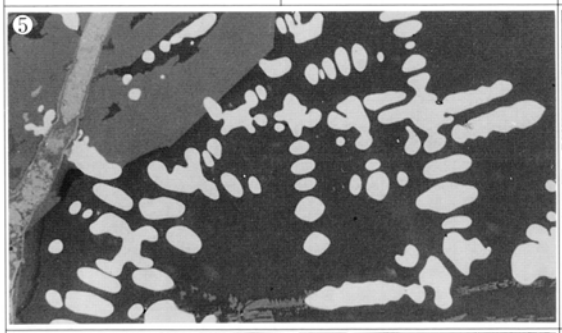
⑥ ×100 板状Wüstite

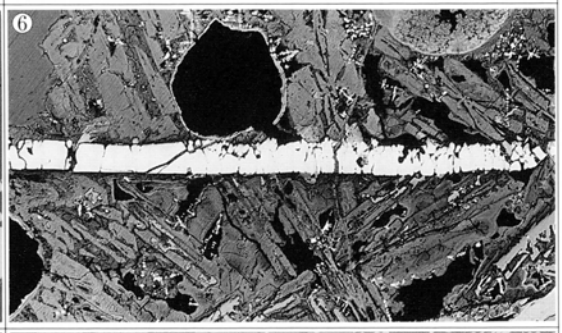
⑦ ×100 白色部：Wüstite

⑧ ×200 硬度圧痕 540Hv荷重200 g

外観写真　1／1.3







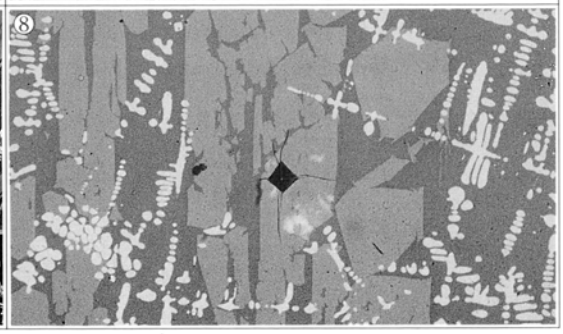


Photo. 1　鉄滓の顕微鏡組織（×87%）

図　　版

田村遺跡周辺航空写真

図版２

(1)　第8次調査区南半部全景(北から)

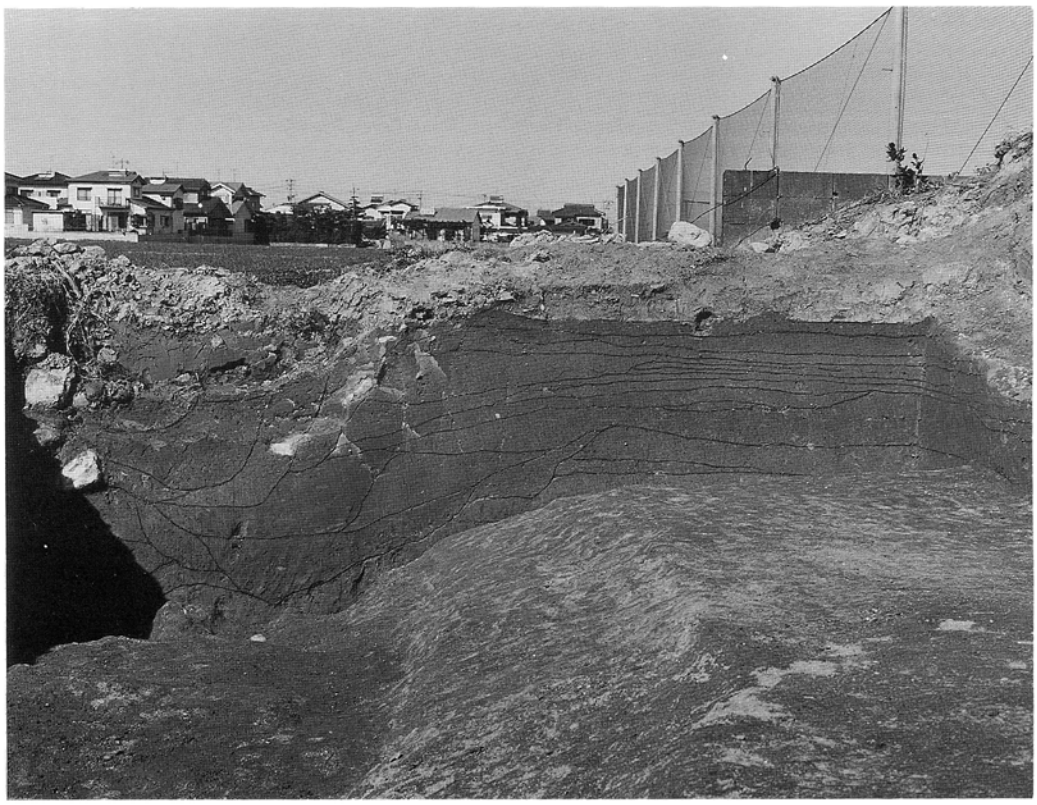
(2)　第8次調査区南半部全景(南から)

(1)　第8次調査区北半部全景(北から)

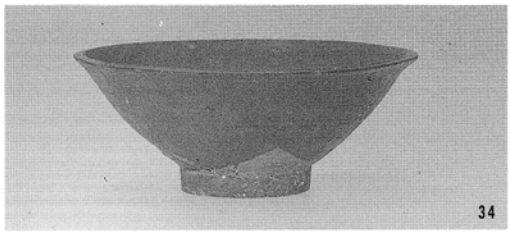
(2)　第8次調査区北半部全景(南から)

図版４

(1)　第8次調査SD001南壁土層断面(北から)



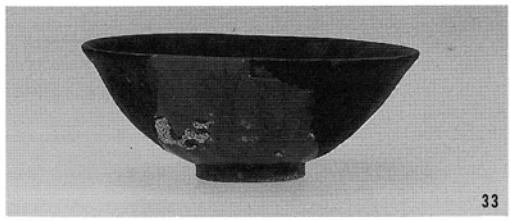
(2)　第8次調査SD001北壁土層断面(南から)

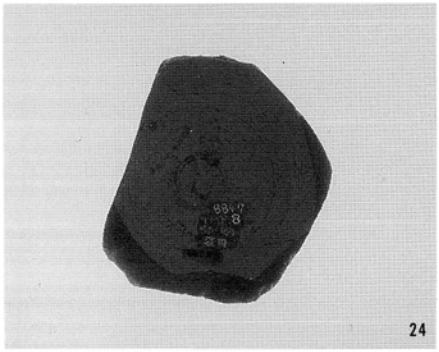

34

37

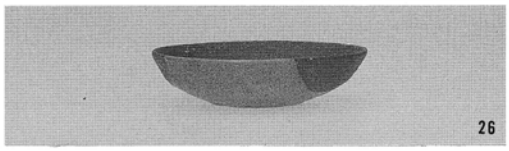
35

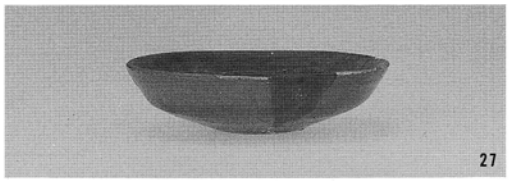
32

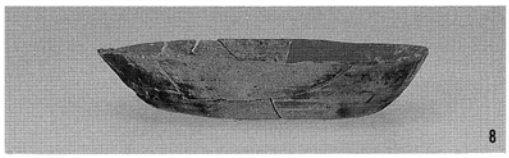

33


24

22


26

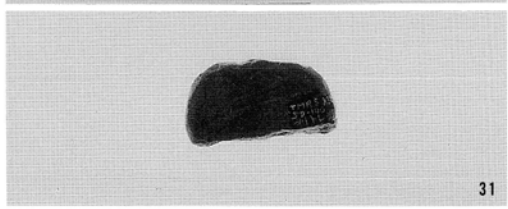

27


8

15

46

45


31

第8次調査出土遺物

図版６

(1)　第11次調査区全景(南から)

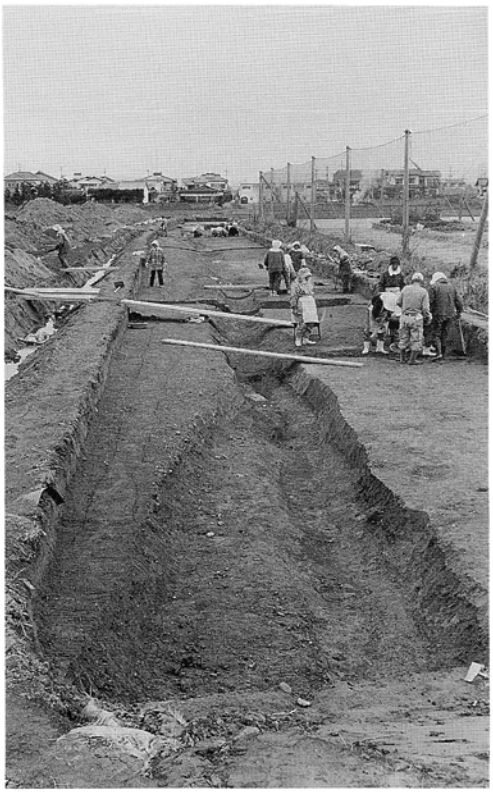
(2)　第11次調査SD001(南から)

(1)　第11次調査SD001(北から)

(2)　第11次調査SD001土層断面(南から)

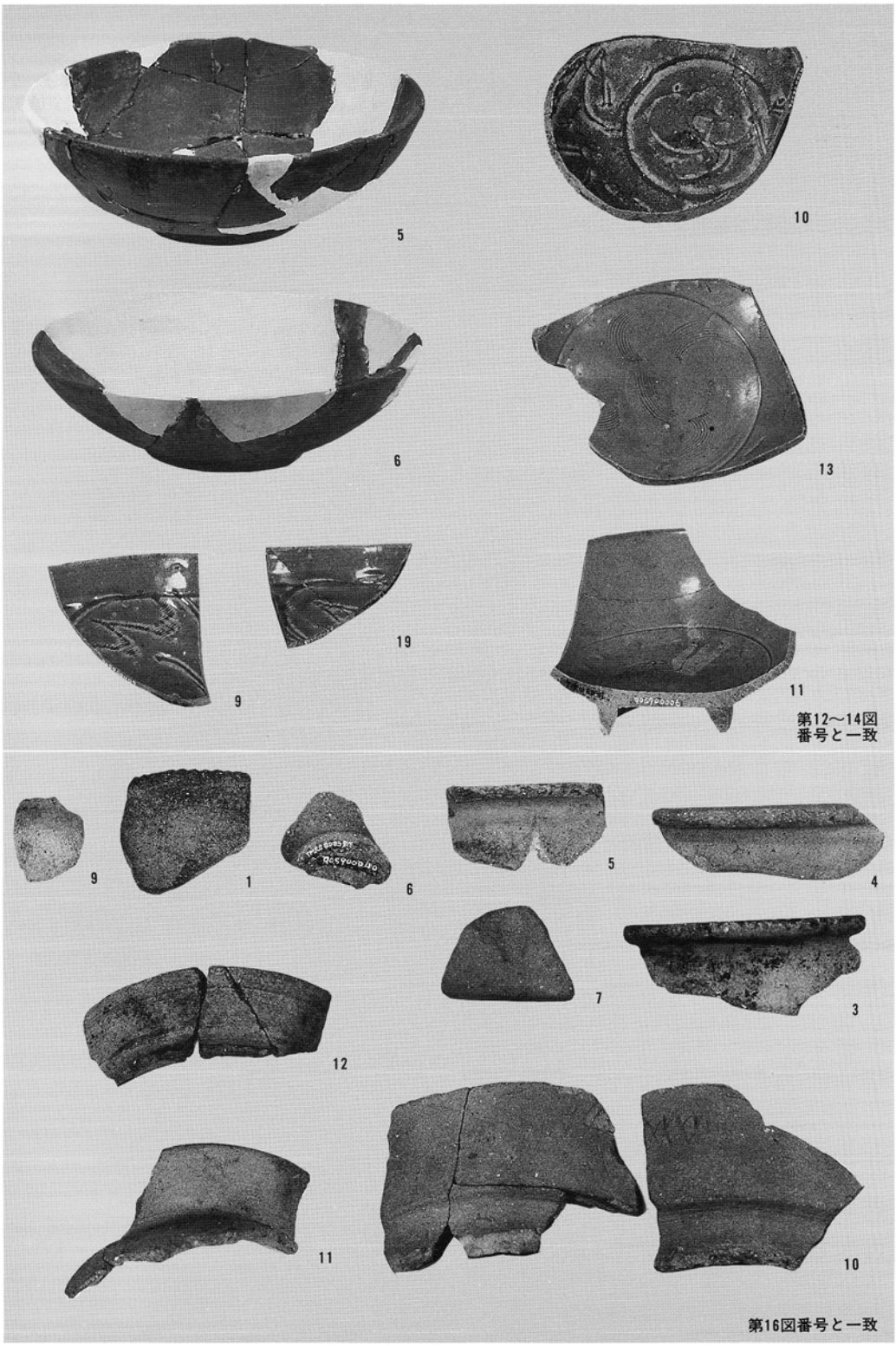
図版８

(1)　水田跡土層断面(南から)



(2)　第11次調風景(南から)

(3)　SD002土層断面(西から)

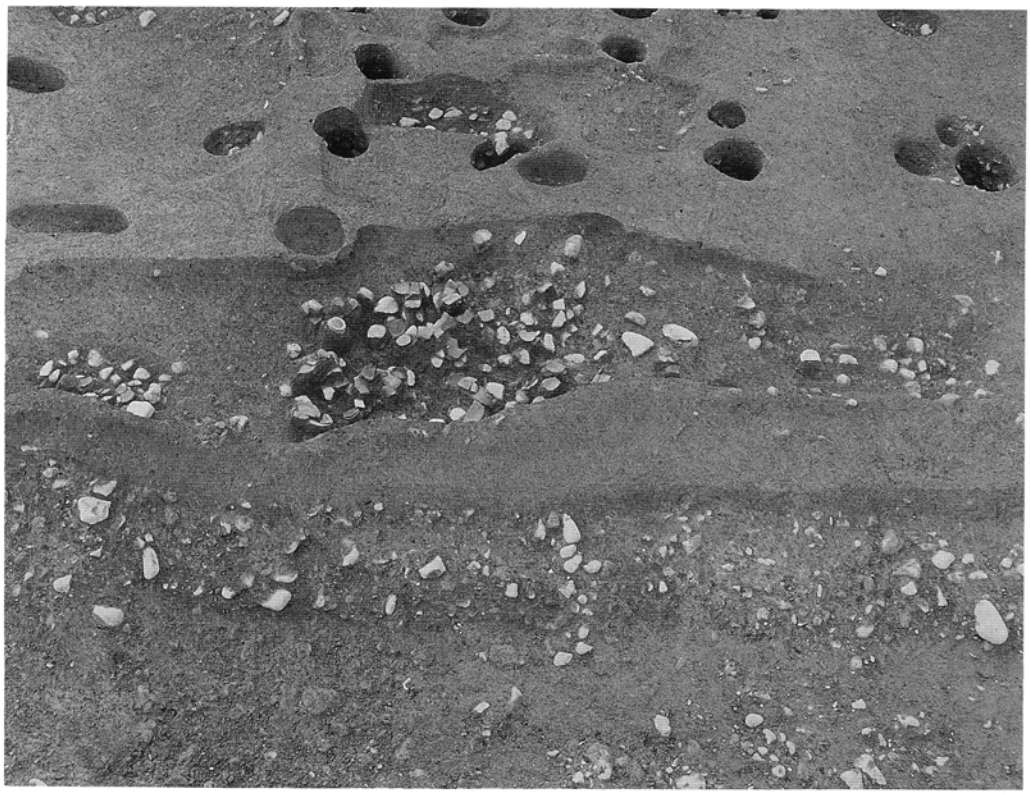


第11次調査出土遺物

図版10

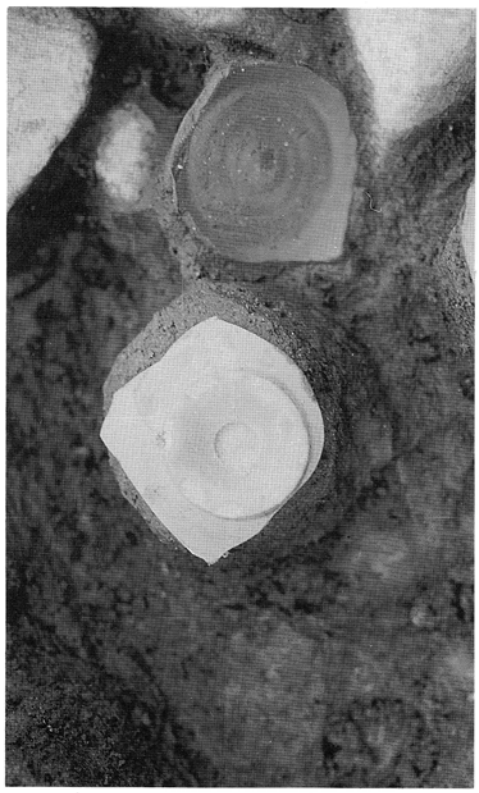
(1)　第13次調査区南半部全景(南から)

(2)　第13次調査区北半部全景(南から)



(1)　SK006(東から)

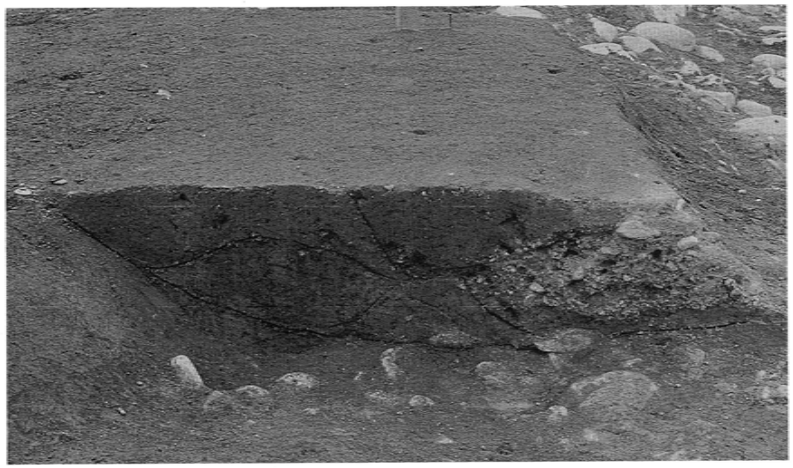
(2)　SK006中央部遺物出土状況(東から)



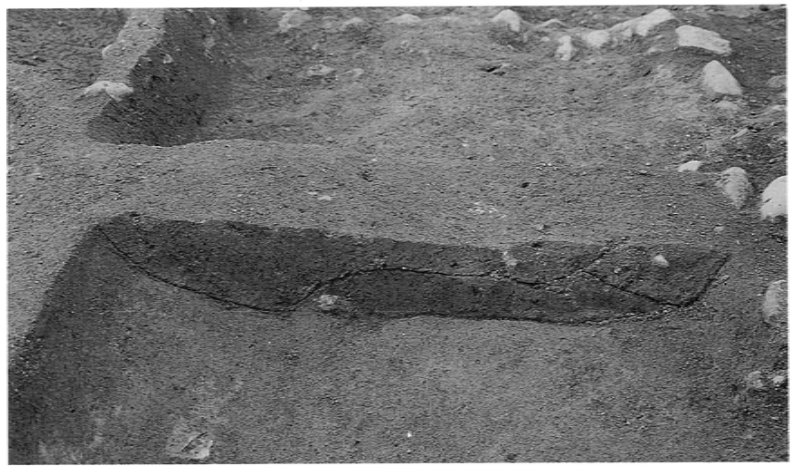
(3)　SK006越州窯青磁碗出土状況(西から)

(1)　SK007(南から)

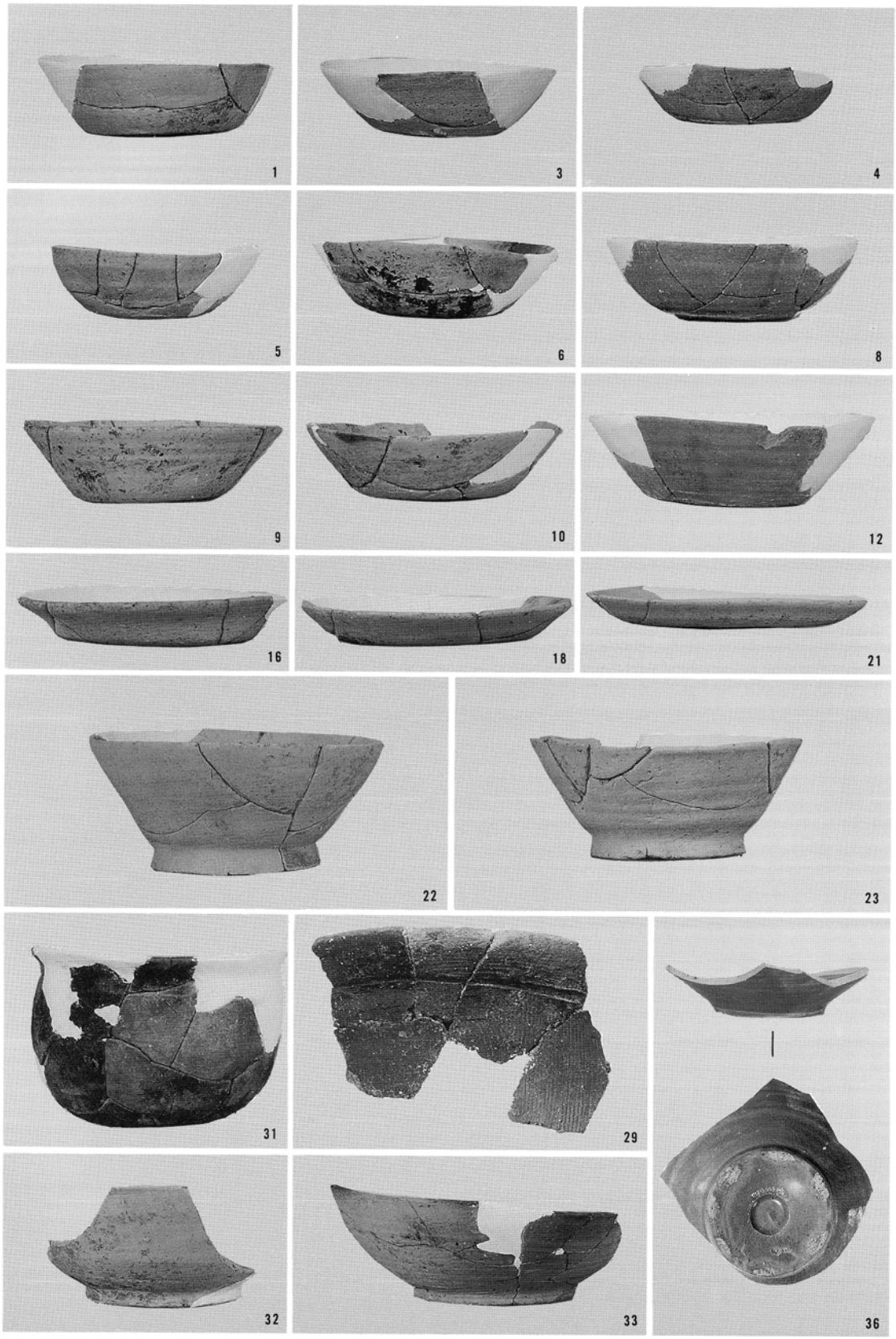
(2)　第13次調査SD001(南から)



(3)　第13次調査SD001土層断面(南から)

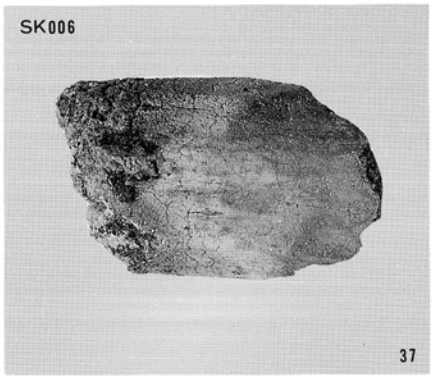


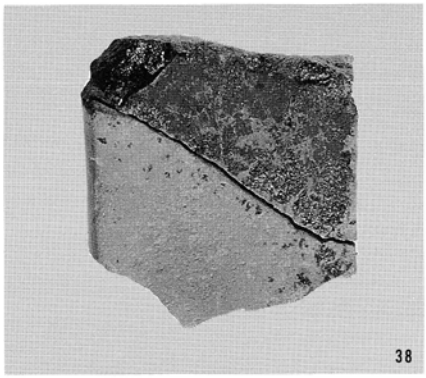
(4)　SD010土層断面(東から)

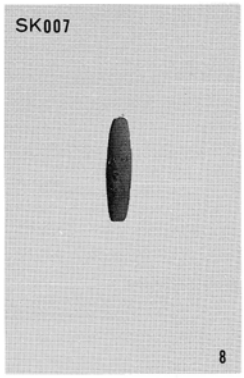


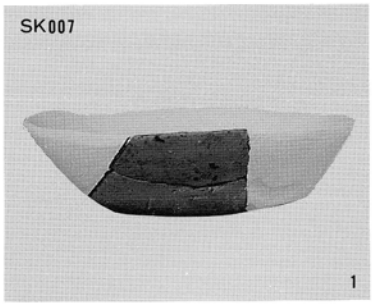
第13次調査出土遺物Ⅰ

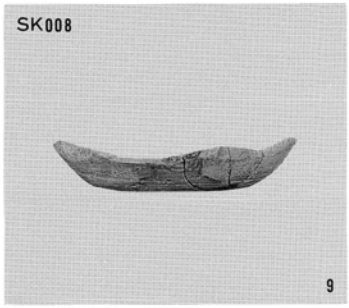
図版14

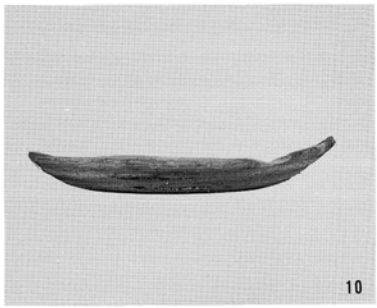


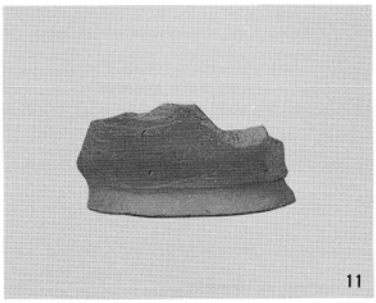


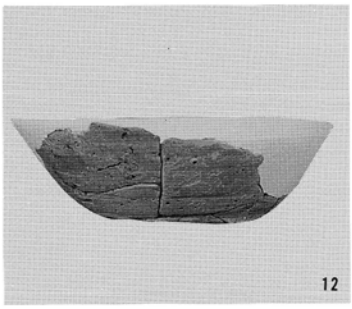


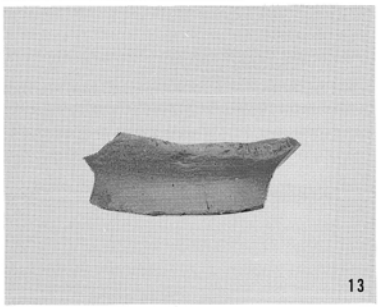


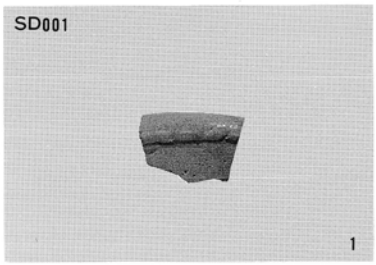


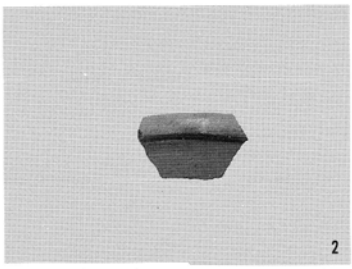


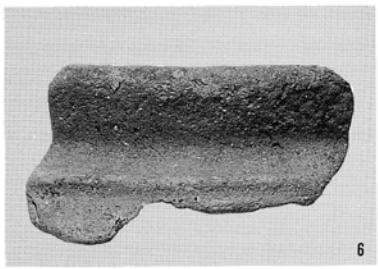


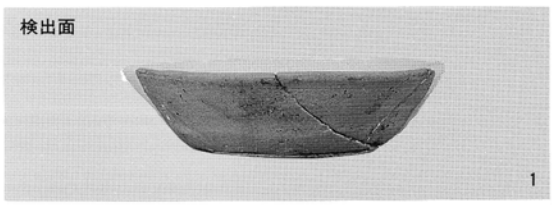


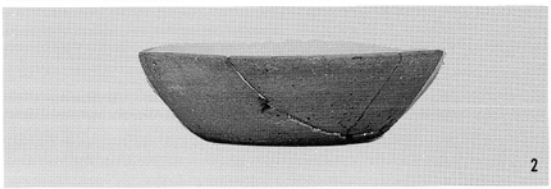


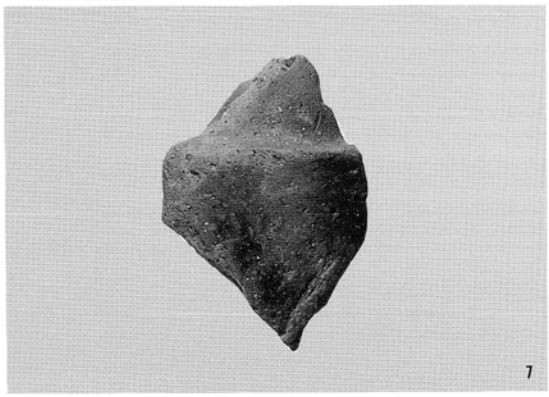












第13次調査出土遺物Ⅱ

田 村 遺 跡 Ⅸ

－第８次・第11次・第13次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第384集

1994年３月31日

発　行　　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神１丁目８番１号

印　刷　　㈲松古堂印刷